

足庵智鑑と『雪竇足菴禪師塔銘』(下)

—天童如浄・永平道元の源流に位置する祖師—

佐藤 秀 孝

画僧の老牛智融と奇しき道交をなす

智鑑は晩年に至って如浄という年齢が六〇歳近くも離れた逸材を法嗣に得ることができたわけであるが、いま一つ智鑑の晩年を彩る事跡として、当代随一の画僧として名声を馳せていた老牛智融(草菴、俗名は邢澄、一一一四—一一九三)が雪竇山に到って智鑑と知り合い道交を結んだ消息が伝えられている。「雪竇足菴禪師塔銘」を撰述した楼鑰が『攻媿集』卷七九「雑著」に「書『老牛智融事』という智融に関する文面を残し、その間の状況を興味深く伝えている。この「老牛智融の事を書す」には、智融が「足菴」すなわち晩年の智鑑と深い交友をなしていた貴重な内容も書き添えられている。晩年を迎えた智鑑の面前に忽然と姿を現わした智融とは如何なる人物であったのか、詩偈に長じた曹洞宗相伝の智鑑と伝説的な水墨画の祖ともいうべき智融、この類い稀な両禅者の遭遇邂逅と道交関係について紹介し、ここに若干の考察を試みることにしたい。

老牛智融とは南宋初期に始まる罔両画(藤隴画)の祖とされる画僧であり、罔両画とは絵画の得意な禅者が自身の余技として編み出した水墨絵画(淡彩画も含む)のことを指している。わずかに濃墨を点じ、極度に薄い淡墨と柔らかい筆の僅かな筆致で朦朧とした表現をとる画法であり、こうした水墨画法が南宋中期の画僧智融によって描かれるようになったと伝承されている。いわば後世の水墨画の源流に位置する人物こそ、ここにいう智融なのであって、その後につづく中国や日本の水墨画の歴史を考える上で智融が与えた影響にはきわめて大きなものが存したと推察される。

智鑑が明州奉化県の雪竇山資聖寺に住持していた頃、智融は遙々と雪竇山にやって来て寓居し智鑑と親しい道交をな

したのであり、智融が老境の智鑑をきわめて慕っていたらしい消息が知られる。『攻媿集』卷七九「書」老牛智融事」で楼鑰は智融に関してどのように伝えているのか、はじめに「書」老牛智融事」の文章の全文を掲載しておきたい。

書「老牛智融事」

淳熙七八年間、始聞雪竇山有僧智融者、善画而絶不以与人。一日見其画、心甚敬之曰、此非二画者、其殆有道之士乎。往山中訪之、融素嚴冷、不可挹酌。一見心許、氣韻談吐、果如所期、取匹紙寄之。久不見与、催以古風。有曰、古人惜墨如惜金、老融惜墨如惜命。又曰、人非求似韻自足、物已忘形影猶映、地蒸宿霧日未高、雨帶寒煙山欲暝。融得之喜、遂為余尺紙、作歲寒三友妙絕。一時嘗問、尚可作人物否。曰、老不復能作、蓋目昏不能下兩筆也。問、豈非阿堵中耶。曰、此雖古語近之而非也。吾所謂兩筆者、蓋欲作人物、須先画目之上臉。此兩筆如人意、則餘皆隨筆而成、精神遂足。只此一語、画家所未發也。自是數年間、時得其得意之筆、精深簡妙、動入神品、尤好作牛、自号老牛智融。或云、源流出于范牛、而妙処過之。融亡矣、不可復得、從其徒間以平生。俗姓邢名澄、世居京師、以医入仕。南渡居臨安万松嶺、号草菴邢郎中、官至成和郎、出入禁廷、賞賚殊渥。不知何從得道、年五十棄官謝妻子、祝髮入靈隱寺。諸公貴人挽之不可、猶下去塵俗不遠。又游諸方。徑山・匡廬、經行殆徧。聞此山之勝、遂投跡為終焉計。假一室深坐、土木形骸泊然。如偶人齋餘、或曳杖以出、有欲相隨、則謝遣之。山有千丈巖、妙峯亭、栖霞、隱潭、皆幽僻絕勝之地。意行独坐、或至移晷、人莫窺其際初、亦不知其能画也。山深多蛇、忽作二奇鬼于壁、一吹火向空、一蹋蛇而掣其尾。蛇患遂除。而時有二火驚、或者病之、又于二火端作土鼻、鼻声為之革。嘗画龍首半体、禱旱輒応、頗近于靈怪。師亦不以自矜也。遇其適意、嚼蔗折草、蘸墨以作一坡岸巖石、尤為古勁、間作物像、不過數筆、寂寥蕭散、生意飛動。或極力摹写、亦有形似、而遽不及遠甚。此自是悟門非積學所能及也。始知二向來幽尋之時、山林雲氣、四時万變。到眼入心一寓、筆端游戲、点化自然高勝、前無古人超出翰墨、畦畛略不可以画、家三尺繩之。或加以勢利、則避之愈深。意苟相与、亦輒不吝。作詩不多語、意清絕、字画亦無俗韻。初自言、若得為僧三十秋、瞑目無言万事休。紹熙四年五月某日卒。寿八十。僧臘如師言。与足菴尤契合、相与終始、先一年足菴示寂。侍者道元、来都下求銘于余。師亦以書見属。未幾而師亡、亦異矣。師晦藏自秘、雖与之周旋者不能尽知、余亦安能知其所至。陳后山謂、淵明無意作詩、但写胸中之妙。余于師之画亦云。東坡贊文与可竹石曰、嗚呼、孰有愛其德如愛其画者乎。此余所以又歎也。元之来也、以師所予。足菴彌勒像及

元所蔵牛溪烟雨二軸遺余、師又寄一掃牛図、意蓋有在。余為作三偈、元欲刻之石且請。書師之大略、附足菴碑陰。因慨然為書之。

とあり、この一文によつて老牛智融の秘められた生涯とその主な事跡が辿れるのであつて、とくに智融と足庵智鑑との希有なる関わりが具さに窺えて興味深いものがある。

一方、この「書老牛智融事」の記載内容を踏まえ、明代の高松明河（汰如法師）も『補統高僧伝』卷二四「雜科篇」に「老牛智融伝」を残しており、その内容はつぎのようになっている。

智融、俗姓邢、初名澄。世居京師、以医入仕。南渡居臨安万松嶺、号草菴邢郎中、官至成和郎、出入禁延、賞賚殊渥。年五十、棄官謝妻子、祝髮入靈隱寺。諸公貴人、挽之不可。於以下去塵俗、弗遠、肆游諸方。径山匡廬、經行殆遍。聞雪竇之勝、遂投跡為終焉計、深坐一室。土木形骸、伯然如偶人、或曳杖以出、有欲相隨、則謝遣之。山中幽僻勝絕之地、意行独坐。或至移晷、人莫窺其際。善画、而絶不以与人。山深多蛇、忽作二奇鬼於壁、一吹火向空、一躍蛇而掣其尾。蛇患遂除。而時有火警、又於火端作土鼻、「鼻」之声為之革。嘗画龍首半体、禱旱輒応、頗近靈怪。師亦不以自矜也。或問画次及人物。師曰、老不復能作、蓋目昏不能下画筆也。曰、画筆豈非阿堵中耶。師曰、此雖古語、近之而非也、吾所云画者、須先画目之上臉。此画如人意、則餘皆隨筆而成。精神遂足、所以難也。或加以勢利、則避之愈深。意苟相契、亦輒与不吝。樓攻媿、求之久不与、催以古風。有曰、古人惜墨如惜金、老融惜墨如惜命。作詩不多語字、画亦無俗韻。初自言、若得為僧三十秋、瞑目無言万事休。紹熙四年五月卒、寿八十。僧臘如師言。尤好作牛、自号老牛智融云。明河曰、旨哉、融牛之論画也。吾聞庖丁之言、得養生焉。（正統藏一三四・一七六d—一七七a）

この『補統高僧伝』の「老牛智融伝」は、先の『攻媿集』の「書老牛智融事」の記載を受けて著わされているもの、簡略に伝記をまとめているためか、智鑑との関わりについてはすべて省略されている。

いま一つ『四明山志』卷二「雪竇資聖寺」の項にも智融の伝記が載せられており、

智融。初名邢澄。以医入士、官至成和郎、居臨安万松嶺。年五十棄官謝妻子、祝髮入靈隱。出遊径山・匡廬。聞雪竇之勝、遂投迹為終焉計。以善画名尤。好作牛出於范牛、而妙処過之、因自号老牛智融。雪竇多蛇、乃作二奇鬼於壁、一吹火向空、一躡蛇而掣其尾。蛇患遂除。而時有火警、或者病之。又於火端作土鼻、鼻声為之革。

嘗画_レ龍首半体、禱_レ早輒応、其適_レ意。時囑_レ蔗折_レ草蘸_レ墨、以作_レ坡岸巖石。

として事跡が簡略にまとめられているが、やはりここでも智鑑との関わりについては全く触れられていない。もつとも同じ「雪竇資聖寺」の項に智鑑と智融の伝が載せられていることから、『四明山志』の編者である黄宗羲（字は太沖、号は南雷・梨洲、一六一〇—一六九五）としては、『攻媿集』の「書_二老牛智融事_一」の記載を通して、両者の関わりを熟知していたのかも知れない。

したがって、智融が雪竇山の智鑑と関わった事跡を伝えているのは僅かに「書_二老牛智融事_一」の記事のみであり、同時代の楼鑰が親しく文章に書き残してくれた意義はきわめて大きなものが存しよう。「書_二老牛智融事_一」によれば、

足菴と尤も契合し、相い互に終始す。一年を先んじて足菴示寂す。侍者道元、都下に来たりて銘を余に求む。師も亦た書を以て属せらる。未だ幾ならざるに師も亡ず、亦た異なるかな。

と記されている。智鑑が示寂した直後、智鑑のもとで侍者を務めていた道元という禪者が国都杭州（都下）にやって来て楼鑰に師匠智鑑の塔銘を撰述してほしい旨を依頼している。このとき智融もまた親しく書簡を書いて楼鑰に送り、同じように智鑑の塔銘を撰述するように求めてきたというのである。このように両者から懇切な依頼を受けたため、楼鑰はまもなく「雪竇足菴禪師塔銘」を撰述したわけであるから、侍者道元とともに智融が果たした功績もきわめて大きかったといえよう。

楼鑰が雪竇山に智融という僧が寓居していることを初めて知ったのは淳熙七年（一一八〇）かその翌年であったというから、智融は智鑑が入寺する以前から雪竇山に在ったことが知られる。あたかも宏智派の自得慧暉が杭州浄慈寺から雪竇山に戻った頃に智融は雪竇山に辿り着いたものと見られ、住持が慧暉から智鑑に代わった後も智融はそのまま雪竇山に留まり、新たに住持となった智鑑と道交を結んだことになる。しかも「書_二老牛智融事_一」に「足菴と尤も契合し、相い互に終始す」とあるから、雪竇山における智融晩年の日々は、師匠とも仰ぐ智鑑の存在を抜きにして語るべきでないほどであったといえよう。智融にとって智鑑は単なる道友という立場を超え、仰ぐべき禅門の師匠のごとき立場であったものらしい。契合とは二つのものが割り符のごとく一致する意であり、智融が智鑑の示す禅の教えに深く契当するところが存したことを意味している。しかも楼鑰は「書_二老牛智融事_一」の末尾に「師の大略を書して、足菴碑陰に附す。因りて慨然として為めに之れを書す」と書き残しているから、楼鑰としては智融が示寂した後「雪竇足菴禪師

塔銘」の碑陰に「書『老牛智融事』の文面を刻んだことを特筆している。碑陽に「雪竇足菴禪師塔銘」を刻み、碑陰に「書『老牛智融事』」を刻んだ石碑が雪竇山の一隅に立石されていたことが判明するわけであるが、この石碑は残念ながら現今に伝えられていない。年齢を重ねて五〇歳を過ぎてから仏門に投じた智融にとって老齡の智鑑の存在は真に敬慕すべき特別なものであり、あるいは智融は智鑑の法を嗣いだ高弟のごとく解されていたのかも知れない。如浄をはじめ智鑑の法嗣や小師たちにとつても、老齡の画僧智融の存在は最年長の法兄のごとき立場ではなかったかとも推測される。

このように「書『老牛智融事』」や『補統高僧伝』の智融伝によれば、智融は南宋中期に画僧すなわち禅僧画家として注目されていたことが知られる。智融は世俗の姓名を邢澄³といい、医者³の身から世俗を棄てて出家し画僧となったという特異な経歴の持ち主である。智融の先祖はもともと北宋の都である開封（河南省）に居して医者として生計を立てていたが、宋の南遷によって杭州臨安府の万松嶺に移り住み、医師として南宋の宮廷に仕え、邢澄も邢郎中として禁延に入りする身となって待遇を得ていた。ところが、邢澄は五〇歳のときというから隆興元年（一一六三）の頃に官職を棄て妻子と離れて剃髮得度し、杭州錢塘県の北山景德靈隱寺に上山してしまふ。多くの友人や同僚が引き留めたものの、邢澄の決意を変えることはできず、邢澄は僧智融と名を改め、世俗を棄てた修行僧の生活を送ることとなった。隆興元年には黄龍派の懶庵道枢（？—一二七六）が靈隱寺に陞住しているから、智融が最初に師事した禅者は道枢ではなかったと見られる。道枢は黄龍慧南—晦堂祖心—靈源惟清—長靈守卓—無伝居慧—懶庵道枢と師資嗣承しており、南宋第二代皇帝の孝宗（趙育、字は元永、一一二七—一一九四、在位は一一六二—一一八九）の帰依を受けている。

その後、智融は諸方に遍参行脚して杭州餘杭県の径山能仁禅院（後の興聖万寿禅寺）や江西の名峰廬山（匡廬）などを普く歴訪したとされる。智融は自ら老牛と号しており、とりわけ牛を描くことを得意とし、禅僧画家としてしだいに知られるようになった。しかも極度な淡墨による略筆を得意としたため、その絵は「罔両画」とも呼ばれ、南宋代から元代初期に至るまでその画風が継承されていくことになる。

老年に至って出家の身となった智融が最終的に辿り着いた地こそ明州奉化県の雪竇山資聖寺であり、このとき資聖寺の住持を務めていたのが晩年を迎えていた智鑑その人であった。雪竇山の勝景を気に入った智融は資聖寺に寓居することを決め、住持智鑑と親しく交友することとなったのである。智鑑と智融は九歳の年齢差があり、智鑑の八〇歳代は智融の七〇歳代に当たっているから、互いに老境の身で人生の最後を雪竇山の幽邃な風光の中で仏道を楽しみ、互いの詩

文と絵画を愛でていた感がある。智融が雪竇山を終焉の地と定めて智鑑のもとに久しく滞在していたことから、同じ時期に智鑑に参随していた若き修行僧如浄なども智融の姿を親しく仰ぎ見ていたことであろう。

しかも「雪竇足菴禪師塔銘」の碑陰に「書『老牛智融事』」の文章が刻まれていたということから、楼鑰としても智鑑と智融の道交を十分に踏まえた上で特別な配慮をなしていた状況を窺い知ることができよう。「書『老牛智融事』」にはつぎのような興味深い事情が記されている。

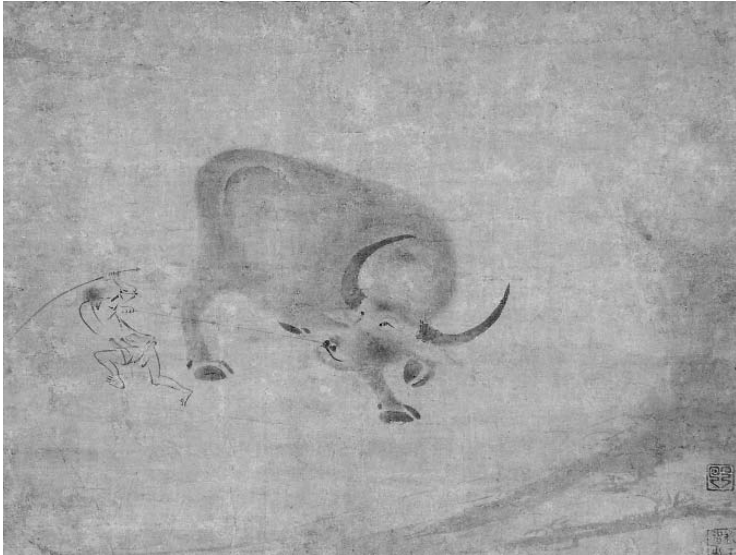
紹熙四年五月某日に卒す。寿八十。僧臘は師の言の如し。足菴と尤も契合し、相い与に終始す。一年を先んじて足菴示寂す。侍者道元、都下に来たりて銘を余に求む。師亦た書を以て属せらる。未だ幾ならずして師亡ず、亦た異なるかな。

智鑑の塔銘を杭州府城（都下）に在った楼鑰に依頼したのは智鑑のもとで侍者を務めていた道元という禪者であったことが知られる。この侍者道元はもちろん日本の永平道元とは全くの別人であるが、智鑑の弟子にも道元という名の僧が存したことは興味深いものがある。智鑑が示寂してまもなく侍者道元は楼鑰のもとを訪れて本師智鑑の塔銘を撰述してほしい旨を直に告げている。その際、侍者道元とは別に智融もまた書簡を楼鑰に送って智鑑の塔銘を書いてほしい旨を督促したとされる。その後、紹熙四年（一一九三）五月に智融は世寿八〇歳で示寂しているから、侍者道元が智鑑の塔銘を楼鑰に依頼したのは、智鑑が示寂した紹熙三年七月から智融が示寂する紹熙四年五月に至る一年未満の間に限られることになり、智融も書簡を楼鑰に呈してまもなく遷化のときを迎えたわけである。

また「書『老牛智融事』」によれば、智鑑が所持していた「弥勒菩薩画像」一軸と、智鑑の侍者であった道元が所持していた「牛溪烟雨」一軸、それに智融が直接に楼鑰に寄せた「帰牛図」一軸のことが記されており、これらに楼鑰は画賛を寄せたものようである。このように智融は雪竇山に居住し、晩年の智鑑と親しい道交をなしていたことが知られるが、智融にとって老熟した智鑑の存在には特別のものがあつた、あたかも嗣法相承の本師のごとき崇拝の対象でもあつたと言えよう。この点、画僧の誉れ高い智融が本師とも仰ぐ智鑑の頂相（肖像画）を描く機会が存したのであれば、きわめて興味深いものを懐かめるが、そのことを伝えるような記載は残されていない。

現在、智融が描いたと伝えられる水墨画としては、僅かに滋賀県甲賀市信楽町田代のMIHO MUSEUMに所蔵される伝・老牛智融筆「牧童図」二幅が存しているにすぎない。これが真に智融が描いた作品なのか否かは定かでないものの、往古の智融作品を偲んで、所蔵者MIHO MUSEUM様の許可を得て掲載しておきたい。

伝・老年智融筆「牧童図」一幅
紙本墨画 縦三〇・〇センチ 横三九・八センチ
滋賀県甲賀市信楽町田代 MIHO MUSEUM 所蔵



老牛智融の画図と宋元禅僧

大慧派の北磻居簡（敬叟、一一六四—一二四六）の『北磻文集』巻七「跋」には「跋『雪竇老融牛軸』」と「跋『老融散聖画軸』（普化・金華・蜆子）」が収められており、同じく巻一〇「祭文」の「達首座索生祭文」にも智融のことが記されている。智融は得意とした牛図のほかに、鎮州普化・金華俱胝・京兆蜆子といった唐末禅門の散聖を題材とした散聖図なども描いていたことが知られる。

さらに松源派の虚堂智愚も『虚堂和尚語録』巻七「偈頌」に「梁楷忘機図」や「常牧溪猿図」とともに、

老融牛図。

純去自忘_レ牧、青糞柳影中。不_レ飡_二桜外草、知是幾春風。（大正蔵四七・二〇四〇c）

という智融の牛の図に寄せた偈頌を残している。智愚は智融を南宋中期に活躍した宮廷画家である梁楷（梁風子、一一五〇—？）や南宋末期に活躍した破庵派の画僧である牧谿法常らの作品と共に列記しており、智融がすぐれた芸術家であったことを改めて窺わしめよう。同じく『虚堂和尚語録』巻一〇「偈頌」にも「墨戲屠生善_二老融牛_一」という偈頌（大正蔵四七・二〇五九b）が載せられている。

同じく南宋末期に活躍した破庵派の希叟紹曇も『希叟和尚語録』「偈頌」に「題_二老融羣牛図_一」（出続蔵一二三・九二a）

の偈頌を残しており、『希叟和尚広録』巻六「題」にも「題」初上人老融牛軸」として同内容の偈頌（正統蔵一二・一四三b）が収められている。また『希叟和尚広録』巻七「題」にも「題」老融猿（枝上座）手捫果」と題する偈頌（正統蔵一二・一五四c）が残されているから、智融の作品は南宋末期に至ってかなり珍重されていたことが窺われる。ここにいう□初上人や□枝上座が如何なる禅者であったのかは定かでないが、当時、彼らは智融の作品を大切に所持していたものと見られ、智融が描いた牛や猿の図あるいは群牛図などが禅門に好まれていた状況を伝えていて興味深い。

元代に活躍した大慧派の元叟行端（慧文正辯仏日普照禪師、一二五五—一三四一）も『元叟端禪師語録』巻七「題跋」の「題」龔翠巖羅漢図」（正統蔵一二・二九c）において、

宋南渡有老融者、由沐京棄儒歸積、以筆端如幻三昧、取忘心事跡、画而成図、使賢愚一目皆了。樓大參謂、老融惜墨如惜金。蓋言其精如此。伝融之學者、四明則有胡直夫、西蜀則有元上人。今觀龔翠巖所作十二相、雖出於老融、脱略筆墨畦徑、則又非胡与元、所能及、融也龔也。（正統蔵一二・二九c）

とあり、南宋末元初の画家である龔開（字は聖予、号は翠巖、一二二一—一三〇五、または一二三二—一三〇七）の「題」龔翠巖羅漢図」に寄せた題跋の中で老融すなわち智融のことを書き残している。しかも智融の学を伝えた者として四明（明州）出身の胡直夫と西蜀（四川省）出身の□元上人を挙げている。胡直夫が描いたとされる絵画としては「夏景山水図」と大慧派の浙翁如琰が賛を寄せた「馬郎婦図」とその法嗣の偃溪広聞が賛を寄せた「布袋図」などが日本に請来されている。一方、西蜀□元上人については如何なる僧か定かでないが、あるいは智鑑の参学門人で智融とともに楼鑰に智鑑の塔銘を依頼した侍者道元のことを指しているであろうか。

智鑑と智融の道交を踏まえるならば、あるいはは画僧の智融が描いた絵画に対し、詩僧でもある智鑑が賛を付したような画軸なども存したものかも知れない。十二世紀末に智融が描いた絵に智鑑の賛が付された合作の一軸などが現今に伝えられていたならば、十三世紀後半の臨済宗破庵派の画僧である牧谿法常（牧溪とも）や大慧派の画僧である玉澗光瑩（瑩玉澗）などに先んじた貴重な水墨画作品として評価され珍重されたはずであろう。

史浩の祭文と古仏の尊称

雪竇：師既亡、太師史文恵公、祭之、以文有曰、了悟円通、如観音大士、随機化俗、如善導和尚。人不以為過也。

師生_二于淮南_一、而化緣独在_二四明_一、屢易_二法席_一。名震_二江湖_一、而終不_レ越_二境_一、自号_二足菴_一。人以_二古仏_一稱_レ之。惟師可_レ下_二以_レ無媿_一云。

補統_二師道声震_二海内_一、而跡曾不_レ越_二四明之境_一、故自号_二足庵_一。

祖燈_二道声震_二海内_一、而跡曾不_レ越_二四明_一、故自号_二足庵_一。

智鑑が示寂して後のこととして「雪竇足菴禪師塔銘」には太師で魏国公の史浩（字は直翁、真隱居士、諡は文惠・忠定、一一〇六—一九四）が書いた祭文のことばを紹介し、つぎのように伝えている。

師既に亡じ、太師の史文惠公、之れを祭るに文を以てし曰うこと有り、「了悟円通なること観音大士の如く、機に随いて俗を化すこと善導和尚の如し」と。人以て過ぎたりと為さざるなり。師、淮南に生まれて、化縁は独り四明に在り、屢しば法席を易う。名は江湖に震い、而も終に境を越えず、自ら足菴と号す。人、古仏を以て之れを稱す。惟うに師は無媿を以て云うべし。

史浩が祭文で智鑑を称えたことばは「了悟円通なること観音大士の如く、機に随いて俗を化すこと善導和尚の如し」というものであった。史浩は明州鄞県の名族である史氏の出身で、智鑑より一歳年少の崇寧五年（一一〇六）に生まれ、紹熙五年（一一九四）四月五日に八九歳で逝去している。後に五山十刹制度を制定したとされる丞相の史弥遠（字は同叔、衛王、諡は忠獻、一一六四—一二三三）は史浩の子に当たると。史浩は宏智派の石窓法恭とも関わりが深く、おそらく郷里明州の寺院で化導を敷いた智鑑ともかなりの道交をなしていたものであろう。『雪竇寺誌』巻六上「祖塔」には、

足菴鑑禪師。宋光宗紹熙壬子示寂。太師史浩有_二祭文_一。監院道成、於_二開禧二年_一立石。旧誌又云、嘉泰二年三月初四日示寂、建_二塔於寺後東山側_一、又一鑑也。世譜中有_二鑑師_一、並録_レ之。以俟_二考証_一。

という記事が存している。さらに『雪竇寺誌』巻六下「祭文」には、実際に史浩が書き記した祭文として、

祭_二足菴鑑禪師_一文。 史浩。

維紹熙三年太歲壬子八月辛丑朔十一日辛亥、太師保寧軍節度使致仕魏国公、食邑一万九千五百戸、食実封八千一百戸、史浩謹以_二香茗庶羞之奠_一、致_二祭于円寂前雪竇足菴鑿公禪師之靈_一。惟師了悟円通如_二観音大士_一、随_二縁化_レ俗如_二善導和尚_一。世之独善自利者、或以為_レ不然、而師安行自若、不_二以為_レ歎_レ此。非_二内有_二所得_一、何以傲然不_レ顧_レ如_レ此。倘或因_レ人而改_レ節、是可_レ奪也。我嘗以_レ是重師之特操聞_レ之。仏氏身心不動、入_二於無量義三昧_一。未_二嘗有_レ言也。至_二於五時九會_一、四辨八音、又未_レ嘗_レ不_レ言。則知_二師之化_レ俗、亦当_レ言而言。爾今師亡矣。想見一念、超然無_二復繫_二念前日之言_一、猶在_二人耳_一。必有_二高

弟^二紀^三其緒、餘識者必自品題。予不^二復云、炷^レ香瀾^レ茗。師其歆^レ之、尚饗。

開禧二年中秋日、守^レ菴前監寺僧道成、立石。

とその全文が載せられている。史浩が智鑑を祀る「祭^二足菴鑑禪師^一文」という祭文を撰述したのは紹熙三年八月一日と記されている。史浩の『鄮峯真隱漫録』卷四三「祭文」には残念ながら「祭^二足菴鑑禪師^一文」は載せられていない。

「雪竇足菴禪師塔銘」によれば、智鑑が示寂したのは八月一六日であるから、示寂する以前ということになれば、記事に矛盾を抱えることになるが、いずれにせよ史浩が智鑑の示寂を悼んで祭文を揮毫したことになる。しかも智鑑の墓塔が存する塔頭（庵の名称は未詳）を守る守塔比丘（塔主）であった前監寺の道成は、史浩が揮毫撰述した祭文を開禧二年（二〇六）八月一五日の中秋日に至って漸く立石しているわけである。塔主の道成としては智鑑が示寂して十五回忌の八月一六日の命日（忌日）に当たる前日中秋日（八月一五日）に史浩の祭文を塔頭の一隅に立石したことになる。この智鑑を祭る文を書き下すと、つぎのようになるであろう。

足菴鑑禪師を祭る文。 史浩。

維れ紹熙三年太歳壬子八月辛丑朔十一日辛亥、太師保寧軍節度使致仕魏国公、食邑一万九千五百戸、食実封八千一百戸の史浩、謹んで香茗庶羞の奠を以て、祭を円寂前雪竇足菴鑿公禪師の靈に致す。惟るに師は了悟円通なること観音大士の如く、縁に随いて俗を化すること善導和尚の如し。世の独善自利の者、或いは以て然らずと為すも、師は安行して自若たり、以て此れを歎と為さず。内に所得有るに非ずして、何ぞ以て傲然として此くの如きを顧みざる。倘し或いは人に因りて節を改めば、是れ奪うべきなり。我れ嘗て是れを以て師の特操を重んじ、之れを聞く。仏氏は身心不動にして、無量義三昧に入る。未だ嘗て言有らざるなり。五時九会・四辨八音に至りて、又た未だ嘗て言わざるにあらず。則ち師の俗を化するを知り、亦た当に言うべくして言う。爾今、師は亡ぜり。想い見るに一念は超然として復た前日の言を懸念すること無し、猶お人の耳に在り。必ず高弟有りて其の緒を紀し、餘識ある者、必ず自ずから品題せん。予、復たは云わず、香を炷き茗を瀾さん。師、其れ之れを歆けたまえ、尚わくは饗けたまえ。

開禧二年中秋の日、菴を守る前監寺僧道成、立石す。

このように史浩が智鑑のために祭文を記したのは紹熙三年八月一日のことであり、この点はなぜか「雪竇足菴禪師塔銘」にいう八月一六日の智鑑示寂と日にちに開きが存している。とりわけ史浩が智鑑の尊霊に対して「惟うに師は了

悟円通なること観音大士の如く、縁に随いて俗を化すること善導和尚の如し」と称えているのは興味深いものがある。円満な悟道を得た深さは観音菩薩のようであり、衆生を教化するさまは唐代初期に活躍した中国浄土教第三祖の善導（終南大師、六一三―六八一）のごときであったと評しているのは興味深い。まさに智鑑が上求菩提と下化衆生の両面を共に具えた優れた禅者であったことを巧に言い当てた表現であり、智鑑は往古の善導のごとく慈悲の念を持って衆生の済度教化に邁進した人だといふのである。

その後、開禧二年の八月一日（中秋旦）に庵すなわち智鑑の塔頭を守っていた高弟の道成が雪竇山の前監寺として史浩撰「祭足菴鑑禪師一文」を実際に立石したわけである。道成に関してはその事跡が全く不明であるが、久しく雪竇山の智鑑のもとで監寺の要職を担っていたものらしく、その後は守塔比丘（塔主）として智鑑の墓塔を守っていることから、智鑑剃度の子飼いの門人（小師）ではなかったかと見られる。あるいは智鑑は剃度の門人に「道」の字を系字として付与していたのかも知れない。おそらく道成は同門の如浄よりは年長で、如浄とも旧知の仲であったものと推測される。

また「雪竇足菴禪師塔銘」では「人、古仏を以て之れを称す。惟うに師は無媿を以て云うべし」と記しており、当代の人々が智鑑を古仏と尊称したことを伝えている。楼鑰は智鑑が古仏の尊称に相応しい禅者であり、尊号に何ら恥じるのではないすぐれた人物であった点を称えている。

日本僧の祇陀大智が元代に智鑑の墓塔を拝登する

智鑑が示寂してまもない頃、入宋して雪竇山を訪れた日本僧に真言律宗の我禅房俊苧（不可棄法師、一一六六―一二二七）が存している。俊苧の伝記史料である『泉涌寺不可棄法師伝』の「建久十年、三十四歳」の項によれば、

同五月初、著「宋朝江陰軍、下帆放碇。時也大宋慶元五年也。即遊「兩浙名境」、到「天台山」、過「石橋」、蒸餅峰左辺、点「茶」五百羅漢、每「盞感」茶花瑞。遂到「雪竇中巖」、咨「受禪法」。《禪師亡名》。其年十月十四日、至「行在徑山」、見「蒙庵禪師」。《統群類九上・四七 a、b》

とあり、日本の建久一〇年（正治元年、南宋の慶元五年、一一九九）に入宋し常州江陰軍（江蘇省）に着岸した俊苧は、最初に台州（浙江省）天台県の天台山を拝登し、天台石橋（石梁瀑布）に到って蒸餅峰左辺の五百羅漢に茶を献ずるなどして後、明州奉化県の雪竇山資聖寺に上山し、ときの住持であった禅者に禅要を問うている。このとき雪竇山の住持を務めてい

たのが如何なる系統の禪者（中巖は道号か）であつたのかは明確でないが、时期的には曹洞宗宏智派の海印徳雲か古巖如壁（堅壁とも）が住持していた頃ではなかつたかと推測される。海印徳雲は自得慧暉の法を嗣いだ高弟であり、古巖如壁も石窓法恭の法を嗣いだ高弟として知られる。その後まもなく俊苒は杭州餘杭県の径山興聖万寿寺へと赴いて楊岐派の蒙庵元聡（仏智禪師、一一三六—二〇九）に参学している。俊苒が入宋渡航して雪寶山に到つたのは智鑑が示寂して七年後のことであり、いまだ雪寶山内には智鑑の遺風が随所に残存していたはずであるうから、俊苒が智鑑について何らかの情報を得ていた可能性は十分に存しよう。

一方、雪寶山に存した智鑑の墓塔に関して注目すべきは、鎌倉末期に日本から入元した曹洞宗永平下の祇陀大智（二二〇—二三六）が『大智禪師偈頌』に「礼_二足庵和尚塔_一」と題するつぎの一首を残していることであろう。

礼_二足庵和尚塔_一。

宗風唱起乳峰前、双_二鎖金針_一事理全。一夜丙丁吹_レ火滅、三千海嶽黒_レ煙。（続曹全・歌頌七五二b）

足庵和尚の塔を礼す。

宗風唱え起こす、乳峰の前。金針を双べ鎖して事理全し。一夜、丙丁が火を吹いて滅し、三千の海嶽、黒きこと煙の如し。

大智は鎌倉末期から南北朝時代に活躍した曹洞禪僧であり、智鑑から大智に至る曹洞宗の系統を示すならば、

足庵智鑑—長翁如浄—永平道元—孤雲懷奘—徹通義介—瑩山紹瑾—明峯素哲—祇陀大智

と嗣承している。大智は在元中に親しく雪寶山に上山し直に智鑑の墓塔を拝登して一偈を詠じたことが知られるとともに、その当時、雪寶山の一隅にいまだ足庵和尚塔が明確に存在していた事実も確かめられる。大智が足庵和尚塔を拝登したのは智鑑が示寂して一三〇年ほどを経た頃に当たるが、元代後期においても智鑑の墓塔が雪寶山中に残っていたことを伝える貴重な一首なのである。この大智のほかには日本から遥々と渡海して雪寶山を訪れた中世曹洞禪者の名はほかに知られていない。大智が雪寶山の足庵和尚塔を実地に仰いで詠じたのが「礼_二足庵和尚塔_一」と題する礼祖塔の偈頌であり、きわめて重要な消息をいまに伝えている。

乳峰とは山中を落下する二本の滝に因む雪寶山の別称であり、そのため雪寶山は一に乳寶とも通称されている。智鑑が雪寶山で大いに曹洞の宗風を唱えたことを大智は「金針を双べ鎖して事理全し」と表現している。金針や事理ということばは深遠な曹洞宗旨を意味した表現であり、『人天眼目』卷三「曹洞宗」に載る楊岐派の山堂徳淳が記した曹洞宗の「要

訣」に「機絲不_レ挂、箇中双鎖_二金針_一。文彩縦横、裏許暗穿_二玉線_一」(大正蔵四八・三二〇c・三二一a)と記されている。¹⁶⁾ 大智が到った当時、足庵和尚塔の近辺に「雪竇足菴禪師塔銘」が残っていたのか否かについては、大智の「礼_二足菴和尚塔_一の偈頌からは読み取ることができない。あるいは「一夜丙丁吹_レ火滅、三千海嶽黒如_レ煙」の語句の一部が智鑑自身の遺偈などを踏まえて詠じられた可能性も存しよう。

智鑑の嗣法門人と参学門人

足菴：嗣法及受度三十餘人。

「雪竇足菴禪師塔銘」が撰述された時点で、楼鑰は智鑑の弟子について「嗣法及び受度は三十餘人なり」と記している。この楼鑰のことは従えば、楼鑰が「雪竇足菴禪師塔銘」を撰述した頃、智鑑には嗣法(伝法)の門人と受度(剃髮得度)の門人が併せて三〇余人ほど存したことが知られる。ただ、残念ながら「雪竇足菴禪師塔銘」には具体的な嗣法の門人や剃度の門人の名は何も記されていない。この三〇人の中のひとりに如浄が含まれているものと見られるが、いまだ出世開堂する以前に当たるところから、この時点で正式な法嗣に名を連ねていたか否かは判然としない。

ちなみにすでに示したごとく「祭_二足菴鑑禪師_{一文}」に「開禧二年中秋日、守_レ菴前監寺僧道成立石」とある守庵比丘(守塔比丘・塔主)で前監寺の道成の名があり、同じく「書_二老牛智融事_一」に「侍者道元来_二都下_一、求_二銘于余_一」とある侍者道元の名も知られる。道成や道元といった僧名が見られることから、あるいは智鑑は剃度の小師(弟子)に「道」の字を法諱の系字として与えていたのかも知れない。智鑑の法孫に当たる日本僧道元とは全く別に道元という名の侍者が存したことは興味深いものがある。道成や道元は智鑑のもとに在った剃度の小師と見られるが、彼らが智鑑の法を嗣いだ伝法の弟子であった可能性も存しようか。少なくとも智鑑には如浄のほかにも何人かの法嗣が存し、その中の幾人かは楼鑰が「雪竇足菴禪師塔銘」が撰述した時点ですでに開堂出世して智鑑に嗣承香を焚いていたものであろう。

一方、日本で南北朝期に編集刊行された『仏祖正伝宗派図』には「雪竇足庵智鑑」の法嗣として「天童如浄」とともに「仗錫棘林□杞」の名が記されている。室町中期の『仏祖宗派図』では「雪竇足菴智鑑」の法嗣として「天童如浄」とともに「仗錫棘林□杞」の名が記されている。また江戸期の宗派図としては「正誤仏祖正伝宗派図」巻一に「雪竇足菴智鑑」の法嗣として「天童長翁如浄」とともに「仗錫棘林□杞」の名が存している。『伝燈歴世譜』下「雲居下」にも「明州雪竇

足菴智鑑」の法嗣として「四明天童長翁如浄」とともに「仗錫棘林□杞」の名が記されている。如浄については別個に詳しく論ずるので、ここではいま一人の嗣法門人とされる棘林□杞ないし棘林□杞について、一通りその事跡を整理してみることしたい。

『仏祖宗派図』のみがその名を「仗錫棘林□杞」と記しているが、それ以外の宗派図はいずれも「仗錫棘林□杞」と伝えていることになろう。棘林とは荊棘林すなわち茨の林のことで、荊棘の林が衣を破り歩行に支障を来たすように菩提に進むことを妨げる煩惱に譬えられる。杞とは刀劍の柄のことで把む意であり、杞とは樟に似た落葉高木の棟（おうち）すなわち梅檀のことであり家具の良材とされる。したがって、この人の名を棘林□杞とすべきか、棘林□杞とすべきか、ここではいずれとも断定し得ないわけであるが、いまは荊棘林と梅檀林の対比から、より多くの宗派図が一樣に載せている棘林□杞をこの人の道号・法諱として採用しておくことにしたい。棘林□杞がもし智鑑の晩年に近い頃の剃度の小師であったとすれば、棘林道杞と称していた可能性も存しよう。宋代以降の禪宗燈史などを詳細に調べても、棘林□杞に該当する禪者の名は全く見出すことができない。

棘林□杞（？—一二五八）がいずれの州の出身で如何なる俗姓であったのかは定かでないが、状況的に如浄と同じように浙江それも明州か越州あたりの出身であったものと推測される。しかもその後の活動期間からして、如浄と同じように智鑑の晩年にその門下に投じた門人であったと見てよく、おそらく如浄より若干遅れて雪竇山の智鑑のもとに投じたものであろう。臨濟宗松源派の虚堂智愚（息耕叟、一一八五—一二六九）の語録である『虚堂和尚語録』巻三「慶元府阿育王山広利禪寺語録」に、

仗錫和尚至上堂。（中略）山僧昔寄霞谷、与棘林老子_レ也如_レ是。别去一十餘年、今日相見亦如_レ是。且道、其中意作麼生。
卓_二主丈_一。如_レ是如_レ是而已矣。（大正藏四七・二〇〇四c—二〇〇五a）

ということばが伝えられている。智愚は明州象山県の陳氏の出身で、松源派の運庵普巖（少瞻、？—一二三二）の法を嗣いだ高弟であり、法嗣に日本僧の南浦紹明（円通大応国師、一二三五—一三〇八）がいる。紹明の流れは日本禅林で大応派として形成され、やがて応燈関から白隠禅へと連なっており、その源流に当たるのが智愚であり、とくに重要な位置にある臨濟禅者といつてよい。智愚が明州（慶元府 鄞県の阿育王山広利禪寺に勅住したのは、宝祐四年（一二五六）四月のことであり、仗錫和尚すなわち棘林□杞（以下、単に棘林杞と表記）が阿育王山の智愚のもとに到ったのが宝祐四年七月

一五日の解夏以前に当たっている。霞谷とは明州定海県東南七〇里に存した啓霞山のことであり、山中には崇梵院（後には仏巖禪寺）が存していた。智愚はそれ以前に啓霞山崇梵院に身を寄せた期間があり、そのとき崇梵院の住持であったのが棘林老師すなわち棘林杞なのである。智愚は淳祐元年（一二四一）の夏より淳祐四年（一二四四）の春頃まで啓霞山の棘林杞のもとに寓居していたのである。この時点で如浄が宝慶三年（一二三二）に示寂してからすでに一五年以上の歳月が過ぎていく。智愚はかつて修行時代の最終段階で杭州浄慈寺に赴いて如浄に参学して問答を交した経緯も存し、如浄と棘林杞の両禪者と関わっている点はきわめて興味深いものがある。

棘林杞の活動のさまを伝える史料としては、この『虚堂和尚語録』と先の宗派図など限られた記事しか見当たらないのは遺憾である。その後、棘林杞は明州鄞県西南一二〇里に存した杖錫山延勝禪院（二に杖錫山延聖禪院とも）に住持したわけであり、一〇数年後の宝祐四年に智愚が明州鄞県の阿育王山広利禪寺に陞住した際、旧交を温めるべく杖錫山の住持として智愚のもとを訪れて親しく再会を果たしている。

『虚堂和尚語録』にはこの「杖錫和尚至上堂」のほかにも随所に棘林杞との交友を伝える記載が残されている。卷六「仏事」には「棘林請為二沙弥一付レ衣」（大正蔵四七・一〇三三c）と題する偈頌が存しており、これは棘林杞が二人の沙弥に袈裟（法衣）を付したことを詠じたものである。『虚堂和尚語録』卷七「偈頌」にも「棘林」（大正蔵四七・一〇三五b）という偈頌が存し、これは啓霞山に寓居していた当時、智愚が棘林杞のために詠じた作と見られる。

さらに『虚堂和尚語録』卷一〇「虚堂和尚新添」には「棘林和尚遺書至」と題して、

因記七峯来玉几、去年花月下雲坳、未レ周二歳一背一盟我、剔尽春燈一眠不交。（大正蔵四七・一〇六二b）

という偈頌が残されている。七峯とは杖錫山が存する四明山の峰々をいい、玉几とは阿育王山の異称であることから、おそらく棘林杞は宝祐四年七月に阿育王山の智愚を訪ねてから、翌年の花月（四月）に智愚のもとを去ったものらしい。それから僅か一年を経て棘林杞は春燈の中で智愚に遺書を呈して遷化したものらしい。春燈とは春の夜を点す燈火のことであり、そのように推測すると、棘林杞が遷化したのは宝祐六年（一二五八）の春であったことなる。本師智鑑が紹熙三年（一一九二）に遷化してより実に六七年もの歳月が流れており、棘林杞はこのときすでに九〇歳を優に越えていた計算なる。

一方、南宋末期の詩僧としても名高い大慧派の物初大観（一一〇一—一二六八）も『物初贖語』卷二「祭」に「杖錫棘林」

と題するつぎのような祭文を残している。

十祥同盟、統々盍簪。公毎_レ来会、咲言惜々。別未_レ幾時、云_レ疾弗_レ起。吾不_レ謂然、遺墨滿_レ紙。大寂定門、電転風急。道本如_レ斯。又奚挹々。洞上厥緒、不_レ絶如_レ綫。長庚嗣_レ輝、燁々燭爛。縁稔_レ四明、坐席屢遷。斗水方_レ池、局横海鱸。我旧訪_レ公、躡_レ雲重重。整_レ殿穹_レ堂、猶湿_レ青紅。日俟峻歩、凌高陟遐。今也不_レ然、孰大_レ其家。寥寥象季、吾道孔艱。公平不_レ留、慨_レ其永嘆。

大観は大慧宗杲―拙庵徳光―北磻居簡―物初大観と嗣承しており、本師である北磻居簡（敬叟、一一六四―一二四六）も『北磻文集』や『北磻詩集』などを著わして詩僧として知られる。大観も晩年の棘林杞と関わりが深かったものらしく、棘林杞の遷化に際して祭文を書き残している。棘林杞は阿育王山の智愚のもとを辞した際、明州鄞県の大慈山教忠報国禅寺の住持であった大観のもとにも立ち寄ったものである。大観と別れてまもなく棘林杞は病を得て起きられなくなり、大寂静中に遷化したとされる。「洞上の厥緒、絶えざること綫の如し」とあり、大観が明確に棘林杞を曹洞禅者であると規定していることが知られる。さらに「縁は四明に稔り、坐席屢しば遷る」と述べているから、棘林杞は啓霞山や仗錫山のみでなく、ほかにもそれ以前に四明（明州）地内のいくつかの禅刹に歴住したらしいことが窺われる。あたかも本師智鑑と同じように棘林杞も明州地内の禅刹に相継いで住持し、明州を拠点に活動していたわけである。

雪竇山の錦鏡池と「錦鏡記」

足菴…師素与_レ余厚。在_二雪竇_一作_二錦鏡_一、以_蓄飛雪、上流為_二一山奇観_一、嘗為_レ之記。

四明…作_二錦鏡池_一以_畜飛雪、上流為_二一山奇観_一。

楼鑰は「雪竇足菴禪師塔銘」にて「師、素より余と厚し。雪竇に在りて錦鏡を作り、以て飛雪を蓄え、上流は一山の奇観と為る、嘗て之れがために記す」と述べており、これを受けて『四明山志』にも「錦鏡池を作り、以て飛雪を畜え、上流は一山の奇観と為る」とまとめられている。智鑑が生前に雪竇山の住職として錦鏡池という造形の湖水を作り、山から流れ落ちる滝が風光明媚な奇観となったと伝えている。しかも日ごろ道交の厚かった楼鑰は智鑑のために自ら「錦鏡記」と題する文章を書き残している。実際に『攻媿集』卷五七「記」には「雪竇山錦鏡記」の全文が残されており、これを旧字のまま示すならばつぎのようである。

雪竇山錦鏡記。

雪竇山名_二天下_一、自_レ下而升。既_三至_二絶頂_一、而地始平曠、四山又環_レ之。寺拋_二正中_一、氣象雄秀。二水不_レ知_二所_一從來、出_レ山之兩腋、而会_二于前_一、徑赴_二大壑_一、峻石削立、險不_レ可_レ測、崩空落_レ崖。飛雪千丈、洞心駭自、勝絶_二一方_一。此山之所_二以得_レ名也。繇_二古以來_一、登覽之士不_レ知_二其幾_一。眩_二于創見_一、何暇擬議。紹興甲子、郡太守尚書莫公將來游、乃始發_二意于万象之表_一、謂_二水去_二太亟_一。属_二寺僧_一以_レ田為_レ池、使_二流匯_二其中_一。寬納而緩出_レ之、則寺當_二少利_一。有_レ詩云、能廢_二千畦_一、淳_二玉雪_一、不_レ妨_二飛練掛_二丹梯_一。読者趨_レ之。而四十餘年、十易_二主人_一、咸睨睨以為_レ難。淳熙十一年、足庵鑿公禪師既至、百廢修葺、取_二莫公之說_一、斟_二酌_一之。八月己未、遂興_二畚鍤_一、池深一尋、縱四百三十尺、広半_レ之。築_二隄南西_一以_レ便_二往來_一、因_レ橋為_レ閘、視_二水漲落_一而閉_レ縱_レ之。明年二月庚子、池成。漪漣拍_レ隄、滄溟如_レ拭、千巖倒景、空明相映。道俗欣嘆、見_二未曾有_一、禽魚上下、咸有_二喜色_一。師問_二名于雪窻張武子良臣_一、武子曰、是所謂淵林錦鏡者也。遂以_二錦鏡_一名、而謂_二余記_一之。余不_レ能_レ習_二陰陽家言_一、然通_二天下一氣_一耳。山如_二人之定形_一、水如_二人之脉絡_一、或滯或泄、當適_二其中_一。池之未_レ作也、水若_レ建_レ瓠、山之氣与_レ之俱逝而不_レ留。及其既積、則淑靈之氣、得_二以扶輿磅_一礴于茲矣。繼自_レ今、其必有_二卓然超徹之士_一、深藏若_レ虛、出_二于此山_一、以振_二祖風_一者、豈惟利而已哉。曩嘗一再游焉、間久不_レ雨、水僅相統、蕭索輪困、固自不_レ惡。惟積雨暴漲、則尤為_二壯偉可_レ觀_一。顧安得_二每每如許_一、及_レ今過_レ之。既坐_二亭上_一、徐徹_二三版_一、水則大至、怒濤迅雷、凌_二駕震疊素蛻_一萬數、哮吼層出、真天下之奇觀也。始惟見_二寒莎野卉_一、紛駭相応。少焉覺_二兩涯石壁_一、亦為_レ之低昂不_レ已、此非_二親至_二其上_一、深蹟而駐觀者、不_レ足_二以知_レ此_一。莫公止謂、不_レ妨_二飛雪之勝_一、不_レ知_二此池之成_一、関機闔開、乃大有_レ功_二于瀑泉_一也。足庵伝_二洞下心宗_一、精鍊刻苦、等慈接物、法施不_レ吝。所_二向傾動_一緇白、教主_二廢刹_一、皆立興_レ之。壯年嘗出_二力于此_一、以辦_二衆縁_一。晚座_二道場_一、年踰_二八十一_一、適_二丁_二歉歲艱食之餘_一、他人支傾補_レ壞、猶懼不_レ濟。乃于_二談笑間_一、成_二此勝事_一、用_二錢百萬_一。外不_レ以_レ詭_二諸人_一、內不_レ以_レ費_二諸帑_一、傾_二囊倒_レ篋、一力為_レ之、信有_二大過_レ人者_一、是役也。僧德宣、実相_二其事_一、妙有_二智思規画多出_二其手_一。又得_二信士單承亮_一、割_二膏腴_一以補_二田之廢_一、此池益可_二以久_一矣。故併書_レ之、以告_二來者_一云。

その後、この楼鑰の「雪竇山錦鏡記」は實際に雪竇山の錦鏡池の池畔に立石されたものらしく、『雪竇寺誌』卷九上「記」にも「錦鏡池記」と題して、つぎのような文章が収録されている。

錦鏡池記。

故宋攻愧先生楼鑰文、呉興趙雍書并篆題。

雪竇山名_二天下_一、自_レ下而升。既_三至_二絶頂_一、其地始平曠、四山環_レ之。寺拋_二正中_一、氣象雄秀。二水出_レ山之兩腋、而会_二于前_一、徑赴_二大壑_一、峻石削立、險不_レ可_レ測、崩空落_レ岬。飛雪千丈、洞心駭目、絶勝_二一方_一。此山之所_二以得_レ名也。紹興甲子、郡

太守尚書莫公將來遊、乃始發意於万象之表、謂水去太亟。属寺僧以田為池、使流匯其中。寬納而緩出之、則寺当少利。有詩曰、能廢千畦、停玉雪、不妨飛練挂丹梯。読者趨之。而四十餘年、十易主人、咸睥睨以為難。淳熙十一年、足菴鑑公禪師既至、百廢修舉、取莫公之說、斟酌之。八月己未、遂興畚鍤、池深一尋、縱四百三十尺、広半之。築隄西南、以便往來、因橋為閘、視水漲落、而閉泄之。明年二月庚子、池成。漪漣拍隄、滄瑩如拭、千巖倒景、空明相映。禽魚上下、咸有喜色。問名於張武子良臣、武子曰、是所謂淵林錦鏡者也。遂以錦鏡一名、而請余記之。余不能習陰陽家言、然通天下一氣耳。山如人之定形、水如人之脉絡、或滯或泄、当適其中。池之未作也、水若建瓴、山之氣与之俱逝而不留。及其既積、則靈淑之氣、得以扶輿磅礪於茲矣。繼自今、其必有卓然超徹之士、深藏若虛、出於此山、以振祖風者、豈惟利而已哉。曩嘗一再遊焉、間久不雨、水僅相統、蕭索輪困、固自不異、惟積雨暴漲、壯偉可觀。顧安得每每如許、及今過之。既坐亭上、徐撤二板、水則大至、怒濤迅雷、凌駕震疊、素蛟数万、咆哮層出、真天下之奇觀也。始惟見寒莎野卉、紛駁相映。少焉見兩崖石壁、亦為低昂不已、此非親至其上、深蹟而駐觀者、不足知此。莫公止謂、不妨飛雪之勝、不知此池之成、乃大有功於瀑泉也。足菴鑿公、伝洞上心宗、精鍊刻苦、慈仁接物、法施不吝。所向傾動、緇白、教主、廢刹、皆立興之。晚坐道場、年踰八十、適丁歉歲、艱食之餘、他人支傾補壞、猶懼不濟。乃於談笑間、成此勝事。外不以調諸人、內不以費諸帑、一力為之、信有過人者、是役也。僧德宣、實相其事、妙有致思、規画多出其手。又得信士單承亮、割膏腴以補田之廢、併書之以告來者。

大元至元二年歲在丙子十二月癸酉朔、住山人松陵積僧喜立。

この「錦鏡池記」の石碑は智鑑の頃に立石されたものではなく、智鑑が示寂して一世紀半近くを経た元代の後至元年（一三三六）一月一日に当時の雪竇山住持であった嗣承末詳の松陵僧喜によって立石されたものである。『雪竇寺誌』に収録されていることから、清代初期までは確実に雪竇山の一隅に「錦鏡池記」が残っていたことになる。篆刻の書体は湖州（浙江省）吳興県の趙雍（字は仲穆、一二九〇—？）によって書筆されており、趙雍は元代の書家として名高い趙孟頫（字は子昂、松雪道人、一二七三—一三二二）の次子にほかならない。一方、住山人の松陵僧喜に関しては禪宗燈史などにその名が載せられておらず、如何なる因縁で一世紀以上を隔てて智鑑ゆかりの楼鑰記「錦鏡池記」をこの時期に立石したのか定かでない。

郡太守尚書莫公とは南宋の紹興年間（一一三一—一一六二）に明州慶元府の太守を務めた尚書の莫将（字は少虚、号は文硯、

一〇八〇—一四八)のことであり、『宝慶四明志』卷一「敍郡上」の「郡守」に、

莫将。數文閣學士左朝請郎。紹興十二年十一月二十四日到任、十四年十一月除。提举江州太平觀。

と記されており、莫将が紹興一二年(一一四二)一月から紹興一四年(一一四四)一月まで明州府主を務めていたことを伝えている。また雪窓張武子良臣とは張良臣(字は武子、雪窗先生)のことであり、この人は晩年の宏智正覚や法嗣の自得慧暉・石窓法恭らと関わりが深い。張良臣が雪寶山の智鑑とも道交が存したことが知られ、淳熙一二年(一一八五)二月に池が完成した際、張良臣が綿鏡の名を安名し、さらに楼鑰に「錦鏡池記」を依頼している。

楼鑰に先師宗珏の塔銘撰述を依頼する

足菴…師且_レ死、手書遺_レ余告_レ別、以_二大休塔銘_一為_レ属。余既銘_レ之。師之徒又以_レ此請、不_レ忍_レ拒也。余不_レ習_二釈氏学_一、然聞、古徳相与伝授之際、多藉_二導師_一有_三以啓_二発_一之。惟師根器過_二絶人_一、自誓_二不_レ悟不_レ為_レ僧、則識_レ趣已。不_レ凡操_レ心如_二鐵石_一、視_レ身猶_二土芥_一。又有_二人所_レ不_レ能_レ及者_一。初雖_三久依_二真歇_一、鄭行之居、略無_二怖畏_一。非_レ有_二師伝_一而遂得_レ道、禅門少_レ見_二其比_一。是時自_二覺般若_一有_二靈真_一。有_下飢則一与_二之食_一、寒則一与_二衣_一之_上驗。夜行_二深雪_一、自然得_レ路、若有_二陰相_一、自以為_二大千世界無_二如_レ我者_一。一見_二大休_一、誦_二言所_レ歷。休徐曰、但尽_二凡心_一、勿_レ為_二異解_一。師為_レ之灌然意消而帰_レ心焉。

「雪寶足菴禪師塔銘」には、楼鑰が智鑑と関わった状況や「天童大休禪師塔銘」と「雪寶足菴禪師塔銘」を撰述した経緯などをつぎのようにまとめている。

師、且に死せんとするに、手づから書して余に遺し、別れを告ぐるに、大休の塔銘を以て属みと為す。余、既に之れを銘す。師の徒、又た此れを以て請うに、拒むに忍びざるなり。余、釈氏の学を習わず、然るに聞く、「古徳、相い与に伝授するの際、多く導師を藉りて以て之れを啓発する有り」と。

智鑑は自ら遷化に臨んで楼鑰に親しく遺書を呈して別れを告げるとともに、本師宗珏のために塔銘を撰述してほしい旨を依頼している。この点は「天童大休禪師塔銘」にも、

足菴住_二雪寶_一數年、与_レ余素厚。紹熙三年、余官後省。忽得_二足菴垂絶之書_一、專以_二先師大休塔銘_一為_レ祝。大休師自号也。余幼欽_二師之名_一、而不_レ忍_レ違_二足菴之祝_一。

足菴、雪寶に住して数年、余と素より厚し。紹熙三年、余、官後に省す。忽ち足菴垂絶の書を得るに、専ら先師大休の塔銘を以て祝いと為す。大休は師の自号なり。余幼きより師の名を欽い、而して足菴の祝いに違うに忍びず。

と記されており、その間の事情をいくぶん詳しく伝えていいる。楼鑰が智鑑と知り合つたのは智鑑が雪寶山に住持して以降のことであるらしく、紹熙三年（一一九二）に楼鑰が官を辞して明州に帰省すると、まもなく智鑑が死に臨んで記した遺書が届いたとされる。その遺書は智鑑が臨終する直前に自ら筆を握つて揮毫したものであり、専ら本師宗珙の塔銘を撰述してほしい旨を書き連ねてあつた。楼鑰は幼い頃から大休宗珙の名を慕つており、智鑑最後の願いを受け入れ、智鑑が示寂してまもない頃にはすでに「天童大休禪師塔銘」を撰述したと述懐している。しかも智鑑の弟子がさらに智鑑の塔銘も依頼して来たことから、楼鑰はこの申し出も拒みきれず「雪寶足菴禪師塔銘」もつづけて撰述しているわけである。楼鑰が智鑑の要請によつて「天童大休禪師塔銘」をまとめ、智鑑の徒弟たちの要請によつて「雪寶足菴禪師塔銘」をまとめてくれたおかげで、宗珙と智鑑の師資の事跡が希有にして後世へと知られることになつたわけであるから、真歇派の系統を継承した日本曹洞宗にとつて楼鑰が果たした功績には計り知れない恩恵が存するであろう。ただ、智鑑の塔銘を楼鑰に依頼した門人に関して具体的な名が記されていないのが惜しまれる。塔銘の依頼者の一人に当時三〇歳を越えたばかりの如浄や同門の棘林□杞などが少しでも関わつていたのであれば興味深いものがあるろう。

後半の「惟だ師の根器は人に過絶す」以降の文章は、智鑑が僧となつて真歇清了に参学し、鄭行山で閑居して独悟した後、大休宗珙に印可証明を受けて嗣法するまでの事跡を概観したものであり、ここではその内容を再説することは控えておきたい。

智鑑の平生の人となり

足菴：師天資樸厚、見地真実、業履孤峻、苦行堅密。至_レ死不_二少変_一、等慈接物、法施不_レ吝。具_二大辯才_一、浩博無碍、為_レ人說法、或自_レ曉至_レ暮、或自_レ昏達_レ旦、至_二連日_一亦無_レ倦。色音吐_二洪暢_一、晚亦不_レ衰。聞者聳服、学徒每出_二衣資_一、請_二師演說_一。此尤禪林所未有也。雲深火冷、尸居淵默。有_二召_レ之者_一、雖_二祁寒隆暑_一、不_レ拒_二一毫施利_一、悉為_二公用_一、丈室蕭然。故六主_二廢刹_一、積_二逋動数千緡_一、不_レ過_二期月_一、百廢具舉。若禱_二雨暘_一、球_二疾苦_一、其応如_レ響。神祠烹宰物命、輒為_レ易_レ以_二素饌_一。有_下蔵_上其鬢髮_一而得_二舍利_一者、此皆世俗所_二創見_一。師不_レ欲_二入言_一之、以為_レ非_二此道之極致_一。使_二其有_レ之、亦

皆師之餘也。

補統：師天資朴厚、見地穩密、操履苦硬、至死不少變。具大辯才、浩瀚無際。叩之滾滾無倦。受施山積、悉為公費。故六主廢刹、積逋動數千緡、不_レ過_レ期月、而百務一新。目_レ其所_レ榻、則丈室蕭然懸磬也。加以_レ精誠_レ所_レ感。禱雨暘_レ球_レ疾苦、其_レ応如_レ響。神祠烹宰、輒為_レ易_レ以_レ素饌。有_レ藏_レ其鬚髮、而得_レ舍利_レ者、此皆世俗所_レ創見。師不欲_レ二人言_レ之、以為_レ非_レ此道之極致。使_レ其有_レ之、皆亦師之餘也。

「雪竇足菴禪師塔銘」には、智鑑の人となりについて、つぎのように伝えている。

師、天資は樸厚にして、見地は真実なり。業履は孤峻にして、苦行は堅密なり。死に至るまで少しも変ぜず。等慈接物、法施して吝しまず。大辯才を具え、浩博にして無碍なり、人のために説法し、或いは暁より暮に至り、或いは昏より旦に達す、連日に至るも亦た倦むこと無し。色音は洪暢を吐き、晩も亦た衰えず。聞く者は聳服し、学徒は毎に衣資を出だして、師に演説せんことを請う。此れ尤も禪林の未だ有らざる所なり。雲は深く火は冷かにして、尸居にして淵黙たり。之れを召す者有らば、祁寒隆暑なりと雖も、一毫の施利を拒まず、悉く公用と為し、丈室は蕭然たり。故に六たび廢刹を主り、逋動數千緡を積み、期月を過_レさずして、百廢具に挙ぐ。

若し雨暘を禱らば、疾苦を球う、其の_レ応ずること響きの如し。神祠の烹宰の物命は、輒ら素饌を以てするを易しと為す。其の鬚髮を藏して舍利を得る者有らば、此れ皆な世俗の創見する所なり。師、人の之れを言うを欲せず、以て此の道の極致に非ずと為す。其れをして之れ有らしむるは、亦た皆な師の餘なり。

このように『補統高僧伝』の記載も「雪竇足菴禪師塔銘」の内容をそのまま受けるものであることから、以下、「雪竇足菴禪師塔銘」に基づいてその内容を簡略に考察しておきたい。

智鑑は生まれつき資質が素朴で情に厚い人であり、ものの見方も堅実であった。日ごろの行為も孤高であり、仏道修行を堅実に努めていた。また生涯にわたって慈しみをもつて人々に接し、法施を惜しまなかつた。説法も巧みで日時を選ばず、聞く者はみな心服し、私財を喜捨して智鑑にしばしば説法を願つたとされ、智鑑は頼まれると拒むことはなく、祈雨や祈晴などの祈禱も行なつたという。しかも檀越から頂いた財施はすべて寺の公用となし、伽藍の維持などに充てたものらしい。このため智鑑が剃り落とした鬚や髪を秘藏して舍利を得ようとする者なども存したとされる。

塔銘の銘文を解釈する

足菴：銘曰、祖師西來、乃始有禪。燈燈相統、皆有師伝。師之得道、幾于神曜。心鏡孤円、大千俱照。曹洞正宗、実觀
 二其承一。十有一伝、至師中興。蛇虺之宅、聞者怖恐。惟師宴坐、曾不為動。振錫出山、掘二大道場一。四衆帰仰、
 広為津梁。生于淮壖、縁在甬東。名震江湖、卒老吾邦。法施不吝、辯才無碍。行実堅苦、而大自在。人称古
 仏一、師則無媿。銘以表之、用詔末世。

「雪竇足菴禪師塔銘」を撰した楼鑰はその末尾に銘文を載せている。これを書き下すならば、つぎのようである。

祖師西來し、乃ち始めて禪有り。燈燈として相い続き、皆な師伝有り。師の道を得ること、神曜に幾し。心鏡は孤円にして、大千俱に照らす。曹洞の正宗、実に其の承くること艱し。十有一伝して、師に至りて中興す。蛇虺の宅、聞く者は怖恐す。惟だ師のみ宴坐し、曾て動ずるを為さず。錫を振いて山を出で、大道場に掘る。四衆帰仰し、広く津梁と為る。淮壖に生まれ、縁は甬東に在り。名は江湖に震い、卒に吾が邦に老ゆ。法施をば吝まず、辯才は無碍なり。行実堅苦にして、大自在なり。人は古仏と称するも、師は則ち媿する無きなり。銘して以て之れを表わし、用いて末世に詔げん。

達磨が西來して中国禪宗の流れが始まり、法燈が代々に連綿と継承され、師資の相承が途切れることなく続いてきた法燈が記されている。ついで智鑑の一代の事跡が詩のかたちで詠じられていることから、そこに記された内容を簡略に整理しながら考察しておきたい。楼鑰は曹洞宗が嗣承し難い面を持ちながらも十一伝して智鑑に至ったとし、しかも「師に至りて中興す」と述べ、智鑑を中興の祖のごとく評しているところに、智鑑に対する楼鑰の深い思い入れが感じられる。また智鑑の活動としては淮壖の滁州全椒県に出生したこと、化縁が甬東すなわち甬江の東下流域の明州の地であったことが特筆されている。蛇虺の宅とは鄭行山で独居していたときの蟒に因む逸話であり、智鑑が庵中に黙々と坐禅を行じて妖気を払ったできごとを述べている。大道場に掘るとは智鑑が雪竇山など明州内の諸禅刹を歴住したことを述べたものである。また四衆帰仰とは出家や在家の人々の帰依を厚く受けたことをいい、津梁とは川の渡場の意であるから、智鑑が多くの人々の精神的な拠り所となったことを表現している。智鑑の名は各地の叢林に知りわたったが、楼鑰としては智鑑があくまで明州の地を離れることなく老齢の身を終えたことを賛嘆している。法施をば吝まず、辯才は無碍なりとは、智鑑が何ら惜しむことなく法施をなし、巧みな説法を駆使して多くの人々に教えを説いたことを述べている。し

かもその行いは堅実であり、まさに古仏と称するのに相応しいものが存したとされる。このように楼鑰は「雪竇足菴禪師塔銘」の末尾に智鑑の事跡を銘文に留めているが、楼鑰が「雪竇足菴禪師塔銘」を書き残してくれたことによって、後世にその存在が知られることとなったわけであり、その面では楼鑰の功績には絶大なものが存したといつてよい。

智鑑の上堂語

つぎに智鑑が行なった上堂示衆について触れておきたいが、智鑑には僅か一上堂しか伝えられていない。『嘉泰普燈録』卷一七「慶元府雪竇足庵智鑿禪師」の章には、

上堂曰、世尊有_二密語_一、迦葉不_二覆藏_一。一夜落華雨、滿城流水香。(卍統藏一三七・二九c)

とあり、『五燈会元』卷一四「明州雪竇智鑿禪師」の章にも同じくこの上堂語が載せられている。『雪竇寺誌』卷五上「法要」の「足菴智鑿禪師」の項にも「上堂」として、

上堂。世尊有_二密語_一、迦葉不_二覆藏_一、一夜落花雨、滿城流水香。

とやはり同じ上堂を載せている。雨で一夜のうちに花が散った。夜が明けて見ると花が流水で運ばれ、街中が花の香りに包まれた。昨夜の雨で花は散ってしまったが、翌日、川の流れとともに花の香りが城中に溢れている。仏陀世尊と摩訶迦葉の間で交わされた「拈華微笑」の消息は朽ちることがなく、いまも花の香りが充ち満ちているといった意となろう。この五言四句の禪語を残したことで智鑑の名は不朽のものとなったと言つて過言でない。道元は『正法眼蔵』「密語」の巻において、

雪竇師翁示_レ衆曰、世尊有_二密語_一、迦葉不_二覆藏_一、一夜落華雨、滿城流水香。

而今、雪竇道の一夜落華雨、滿城流水香、それ親密なり。これを拳似して、仏祖の眼睛・鼻孔を検点すべし。臨濟・徳山のおよぶべきところにあらず。眼睛裏の鼻孔を参開すべし。耳処の鼻頭を尖聡ならしむるなり。いはんや耳鼻眼睛裏ふるきにあらず、あらたなるにあらざる渾身心ならしむ。これを華雨世界起の道理とす。師翁道の滿城流水香、それ藏身影弥露なり。かくのごとくあるがゆえに、仏祖家裡の家常には、世尊有密語、迦葉不覆藏を参究透過するなり。七仏・世尊ほとけごとに、而今のごとく参学す。迦葉・釈迦おなじく而今のごとく究辨きたれり。(道元全集上・三九五〜三九六頁)

として師翁智鑑の上堂(示衆)を取り上げて絶賛しており、智鑑を明確に師翁として位置づけている。道元としては智鑑

の示衆「一夜、落華の雨、滿城、流水香る」の語句こそ密語の端的を示したことばであるとする。春の風光の中で落華が舞い散り、滿城の流水が花の香りに満ちているさまに世尊の密語の世界が顕現していると語るわけである。

一方、臨濟宗大応派（大徳寺派）の一休宗純（狂雲子、一三九四—一四八二）もこの智鑑の語句を好み、一行書として「一夜落花雨、滿城流水香」と揮毫した墨蹟が東京国立博物館編『特別展 茶の湯』（平成二九年（二〇一七）四月）に個人蔵として掲載されている。道元や一休宗純を魅了した「一夜落花雨、滿城流水香」の名句を残したことで、智鑑はまさに後世に燦然と輝く存在となったわけである。

明末清初に活躍した曹洞正宗の百愚浄斯（二六一〇—一六六五）も『百愚斯禪師語録』巻一五「拈古」に、

拳、雪竇智鑑禪師、児時母与洗_レ手傷、問曰、是什麼。雪云、我手是仏手。後依_二真歇於長蘆、天童首_レ衆。又遯_二象山、深夜百怪俱作、乃大悟。後上堂、世尊有_二密語、迦葉不_二覆蔵、一夜落花雨、滿城流水香。

師云、金翅生来勢不_レ群、乍飛便解_二取_レ龍吞_一。搖_二地軸、拔_二天根、直至_二而今_一海嶽昏。（禪宗全書七四・四二四b）

と記しており、智鑑が幼少期になした逸話や前半生における修行期の事跡および住持期の上堂語として「一夜落花雨、滿城流水香」の語句を併せて古則として取り上げ、拈古にて「金翅生まれ来たりて勢い群ぜず、乍ち飛びて便ち龍を取りて呑むことを解す。地軸を揺らし天根を抜き、直に而今に至りて海嶽昏し」と評している。

雪竇山の景勝を詩偈に詠ずる

四明…又以_二雪竇雜詠三十首_一、為_二智鑑所_レ作。然雜詠中有_二御書亭_一。亭造_二於淳祐六年_一。智鑑卒_二於紹熙_一、相去五十四年。作_二雜詠_一者、別是一僧鑑也。

『嘉泰普燈録』や『五燈会元』など禪宗燈史では明確でないが、当時、智鑑は偈頌の名手として知られていたものらしく、雪竇山で折に触れて多くの作を詠じている。智鑑が雪竇山の景勝を偈頌に詠じたことは「雪竇足菴禪師塔銘」には記されていないものの、『四明山志』によれば、

又た『雪竇雜詠三十首』を以て、智鑑が作る所と為す。然して雜詠中に「御書亭」有り。亭は淳祐六年に造らる。智鑑は紹熙に卒し、相い去ること五十四年なり。雜詠を作る者、別に是れ一僧の鑑なり。

とあり、智鑑に『雪竇雜詠三十首』が存したことを伝えている。ただし、その中の一首に淳祐六年（一二四六）に造立さ

れた「御書亭」を詠じた偈頌が含まれていることを理由に智鑑とは別に口鑑という禪者が存して『雪竇雜詠三十首』を著わしたと推測している。一方、『雪竇寺志略』『歷代禪師』の「宋」には「足菴鑑禪師」の項と「智鑿禪師」の項が別に収められている。「足菴鑑禪師」の項には、

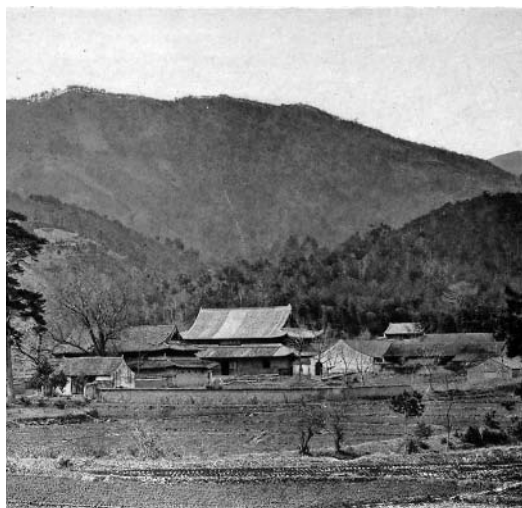
足菴鑑禪師（詩三首）。師嗣「真歇了」。其法嗣天童如淨。

万歳塔。山靈顯神威、三祝「君王寿」、一塔默無「言」、永鎮「江山旧」。

御書亭。昭陵安寢夜、飛夢到「山丘」、往事難「追復」、高亭絶「勝遊」。

往古の雪竇寺伽藍の遠景

清末同治十一年（一八七二）撮影、雪竇寺法恩法師より提供



往古の雪竇寺含珠林

一九六八年撮影、雪竇寺法恩法師より提供



天開図画。青山峭如_レ削、翠黛濃_二於_レ墨、良工画不_レ如、大造_二何_レ寥廓。

とあり、なぜか大休宗珙ではなく真歇清了の法嗣として「足菴智鑑禪師」の名を挙げ、法嗣に天童如浄がいることを伝えており、併せて「万歳塔」と「御書亭」と「天開図画」という五言四句の詩偈三首を載せている。一方、「智鑿禪師」の項では、

智鑿禪師。師滁州吳氏子。兒時、母与洗_二手_一瘍、因云、是甚麼。对云、我手是仏手。長失_二特_一怙、依_二真歇_一於長蘆。大休首_レ衆、即器_レ之。後遯_二象山_一、百怪不_レ能_レ惑。深夜開悟、求_二證_一於延壽、復見_二大休_一。師嗣_二天童珙_一、其法嗣天童如浄。

上堂、世尊有_二密語_一、迦葉不_レ覆藏。一夜落華雨、滿城流水香。

とあり、内容は『五燈会元』の智鑑の章を受けて著されている。ここでは天童山の宗珙の法嗣と記しているが、宗珙の道号である大休と天童の珙（宗珙）との関わりが曖昧となっている。「智鑿禪師」の項はすべて足庵智鑑の記事を載せており、これでは「足菴智鑑禪師」と「智鑿禪師」の別人説は成り立たないであろう。本稿ではそれらを智鑑が詠じた詩偈と解して論考を進めることにしたい。

いづれにせよ、智鑑には『雪寶雜詠三十首』と題する三〇首ほどの偈頌をまとめた詩文集の類いが存し、何らかのかたちで『雪寶寺志畧』『雪寶寺誌』が編纂される頃も雪寶山内に残されていたことが知られる。ただし、『四明山志』では雪寶山内に理宗（趙昀、一一〇五―一二六四、在位は一二二四―一二六四）ゆかりの御書亭が創られた淳祐六年（一二四六）以降に詠じた詩偈であろうと解し、紹熙三年（一一九二）に智鑑が示寂して五四年の歳月が過ぎていることから、『雪寶雜詠三十首』を作った禪者として足庵智鑑や智鑿とは別にさらにいま一人の口鑑という名の僧がいたのだと推測している。この説では足庵智鑑と智鑿のほかにさらに別に淳祐年間（一二四一―一二五二）に口鑑という禪者が存したことになる、より一層の矛盾が生じてしまうことから、到底、この説は肯うことができない憶測であろう。

淳祐中に雪寶山に住し、著に『雪寶雜詠三十首』が存したが、すでに失われたとしており、その詩が世に行われたとする。智鑑の存命中となれば、淳祐は明らかに淳熙の誤りであるが、智鑑が雪寶山の景勝を詠じた『雪寶雜詠』を著したというのは史実と見られ、その詩偈が『雪寶寺誌』に収められている智鑑の作と見てよいだろう。智鑑は詩偈に長じていたものと見られ、雪寶山内の諸景勝を五言四句の詩によって詠じている。『雪寶寺誌』卷二「峯」には、

乳峯。其峯最高居_二正中_一、以_二瀑所_一從出_二故名。

足菴智鑑禪師詩云、崖寶乳堪_レ吸、凝_レ眸翠作_レ屏、老禪初定起、山鳥自呼_レ名。

崖竇の乳は啜るに堪えたり、眸を凝らせば翠は屏を作す。

老禪初めて定より起つるに、山鳥は自ずから名を呼ぶ。

中峯。其峯高且深、智覺壽禪師嘗結菴焉。相伝宗鏡録脱稿於此。

鑑禪師詩云、禪子著書處、雲房半已傾、中宵千嶂月、的的為誰明。

禪子が書を著わす處、雲房は半ば已に傾く。中宵に千嶂の月は、的的として誰が為めに明かなる。

石筍峯。在「下隱潭」、与削壁並峙。

鑑禪師詩云、巉巖石如筍、高標凜貞節、解籜若成林、疑有鸞鳳歇。

巉巖の石は筍の如く、高標は凜として節を貞す。籜を解くに林と成るが若し、疑うらくは鸞鳳有りて歇むかと。

千丈巖。兩崖削立、万仞可半、壁許有石、突出若盤、瀑為激狀、既散復聚、狀如飛雪。

鑑禪師詩云、懸崖如削鍊、瀑布挂長空、六月飛晴雪、玉龍歸乳峯。

懸崖は鍊を削るが如く、瀑布は長空に挂る。六月に晴雪を飛ばし、玉龍は乳峯に帰る。

獅子巖。在「妙高墻」、右有獅子蹲踞之狀。

鑑禪師詩云、昂空勢不巳、踞地何雄哉、白雲遮不巳、依旧出頭來。

空に昂りて勢い巳まず、地に踞まりて何と雄なるかな。白雲も遮り得ず、旧きに依りて出頭し來たる。

徐鳧巖。雪竇西十五里、重崖峭壁、瀑飛千丈、冬夏不絕、龍窟其上下、為「鞠猴巖」、有「三」大字刻石。然徐鳧之名莫可攷、

或曰、昔有「僊人」、乘鳧上升、以此得名。巖上有「巨跡」尚存。

鑑禪師詩云、蕭然上方境、人稀知地僻、徒聞古僊人、石上有遺跡。

蕭然たり上方の境。人、地僻を知ること稀なり。徒らに聞く古僊の人、石上に遺跡有り。

とあり、「乳峯」「中峯」「石筍峯」「千丈巖」「獅子巖」「徐鳧巖」と題した六首の詩偈が残されている。これらはいずれも雪竇山に存する峰や巖であり、智鑑がそれぞれを眺めたり実際に到ったりして詠じたものである。乳峰は雪竇山の最高峰であり、そこから流れ落ちる二本の瀑布に因んで名付けられており、このため雪竇山のことを乳竇とも称している。中峰はかつて法眼宗の永明延壽が庵を結んで『宗鏡録』を脱稿した地とされており、智鑑も「禪子が書を著わす處」と詠じている。石筍峰・千丈巖・獅子巖・徐鳧巖もそれぞれ雪竇山を代表する峰や巖なのである。

また『雪寶寺誌』卷二「洞」にも、雪寶山の存する洞窟として、

玉龍洞。在二十八折洞水、接西澗水。

鑑禪師詩云、山椒嵌石室、中有白龍湫、人皆食其德、何事不封侯。

山椒は石室に嵌み、中に白龍湫有り。人は皆な其の徳を食し、何事か封侯せざる。

丹山洞。

鑑禪師詩云、烟霞籠錦石、日出耀光彩、仙子竟何之。迷踪今尚在。

烟霞は錦石に籠り、日出でて光彩を耀かす。仙子は竟に何くにか之く。迷踪は今ま尚お在り。

とあり、山中の「玉龍洞」と「丹山洞」を詠じた二首の詩偈が残されている。同じく『雪寶寺誌』卷二「臺」に、
妙高臺。巖石突起、寬平如臺、下俯浚谷、深不可測。水從隱潭來者、環遶其下。左右山壁立巉削、人田其中畦腴

錯雜前則万峰簇聚、曠覽無際、此本山最勝處也。今於一塙之東折坐壬向丙、建窰堵波、以供老人真藏。

鑑禪師詩云、一峯何突兀、不下与衆峯齊、縱目乾坤窄、回頭日月低。

一峰、何ぞ突兀として、衆峰と齊しからざる。縦目すれば乾坤窄く、回頭すれば日月低し。

とあり、山中の「妙高臺」を詠じた一首の詩偈が残されている。妙高臺は巖石が突起して平らで台のようになってい
ることから名付けられている。『雪寶寺誌』卷二「嶺」に、

百步嶺。俗名百步街。由曉暉嶺而上、可三以仰視瀑流。

鑑禪師詩云、危梯三百尺、縹緲入雲端、世運多險巖、須知行路難。

危梯の三百尺、縹緲として雲端に入る。世運に峻嶮多し、須らく行路の難きを知るべし。

とあり、山中の「百步嶺」を詠じた一首の詩偈が残されている。

同じく『雪寶寺誌』卷二「林」に、

含珠林。寺前小阜、突起若含珠。然中有二松、根一而莖四、從下直挺而上更奇。

鑑禪師詩云、風勁蕭蕭響、露滴箇箇圓、坐看西山月、渾疑墮我前。

風勁は蕭蕭として響き、露滴は箇箇に円かなり。坐して看る、西山の月。渾て我が前に墮つるかと思ふ。

とあり、山中の松林である「含珠林」を詠じた一首の詩偈が残されている。同じく『雪寶寺誌』卷二「潭」にも、

桃花坑。故老相伝、寺之東澗、其旁環植桃花。汎時色如美錦。因名。攷宝慶誌云、四明山上二十里雲之南、壁立方仞、延袤數百尺、巖色紅白、相間隱映如桃花、初發故以得_レ名。此証前説之謬。

鑑禪師詩云、地僻人居少、林深路轉迷、桃花流_レ水細、不_レ異_二武陵溪_一。

地は僻くして人の居すること少なし、林は深くして路轉た迷う。桃花は水に流れて細く、武陵溪に異ならず。

とあり、「桃花坑」という潭を詠じた一首の詩偈が残されている。このように卷二にはいずれも雪竇山の峰・洞・臺・嶺・林・潭・坑という景勝を智鑑が詩文の才を活かして五言四句の詩偈に残したものである。

さらに智鑑は人々によって建てられた雪竇山内の建物についても詩偈を詠じている。「梵刹」「殿」「堂」「樓」「閣」など寺内の堂宇に関しては詩を詠じてはいないが、『雪竇寺誌』卷三「塔」には、

万歲塔。在_二寺南案山上_一。或云_二因山_一、勢欠_レ高故設_レ此。

鑑禪師詩云、山靈顯_二神威_一、三祝_二君王壽_一、一塔默無_レ言、永鎮_二江山旧_一。

山靈は神威を顯し、三たび君王の寿を祝う。一塔、黙して言無く、永えに江山の旧きを鎮む。

とあり、寺の南の案山にある「万歲塔」を詠じた一首の詩偈が残されている。また『雪竇寺誌』卷三「亭」にも、

御書亭。宋仁宗夢遊_二是山_一。理宗御_二書_一、夢名山四大字、開禪師作_レ文、紀_レ之勒_レ碑。寺南搆_レ亭、以便瞻仰。西折而至_二山

門_一、約半里許、遙望_二与_レ寺對。

鑑禪師詩云、昭陵安寢夜、飛_レ夢到_二山丘_一、往事難_二追復_一、高亭絶_二勝遊_一。

昭陵が安かに寝るの夜、夢飛びて山丘に到る。往事は追復し難く、高亭は勝遊を絶す。

入山亭。距_二寺七里許_一。凡_レ陟降者必憩焉。宋致和乙未、達觀穎禪師建。至元統乙亥、石室瑛禪師復新_レ之。初名_二雪竇山亭_一、復

易_二雪竇禪閣_一。明嘉隆間、圯不_二克復_一、戴公澳捐資重修、顔之曰_二善息_一。

鑑禪師詩云、荒蕪行_レ尽_レ处、幽亭聊_レ暫_レ止、帶_レ雨策孤筇、登_レ高從_レ此始。

荒蕪行き尽くす处、幽亭にて聊か暫く止まる。雨を帯びし策は孤筇、高きに登りて此れ從り始まる。

寒華亭。即半路井亭。

鑑禪師詩云、山深寒氣重、幽处生_二清華_一、露浥石苔紫、風吹簷竹斜。

山深くして寒氣重く、幽処に清華を生ず。露浥りて石苔は紫に、風吹きて簷竹は斜めなり。

飛雪亭。在三千丈巖之巔^一、亭圯。嘉靖間、郡守沈公愷新^レ之。今廢。

鑑禪師詩云、壁立崖萬仞、奔湍走玉虬、倚^レ闌看^レ不足、欲^レ去且遲留。

壁は立ち崖は万仞、奔湍走ること玉虬のごとし。闌に倚りて看れども足らず、去らんと欲すれども且らく遅留す。

隱秀亭。

鑑禪師詩云、萬峯雨初過、翠黛何須^レ染。流光滄^二闌干^一、爽氣手可^レ攬。

万峰、雨初めて過ぎ、翠黛、何ぞ染まるを須いん。流光は闌干に滄り、爽気は手にて攬すべし。

とあり、資聖寺内や雪竇山の各所に建てられた「御書亭」「入山亭」「寒華亭」「飛雪亭」「隱秀亭」と題した五首の詩偈が残されている。とくにこの中で問題となるのが「御書亭」に関して、

御書亭。宋の仁宗、夢に是の山に遊ぶ。理宗は「応夢名山」の四大字を御書し、開禪師、文を作り、之れを紀して碑に勒む。寺の南に亭を構え、便を以て瞻仰す。西へと折れて山門に至ること約半里許、遙かに望み寺と対す。

という記述が付されている点である。寺の西に存した御書亭はもともと北宋の仁宗（趙禎、一〇一〇—一〇六三、在位は一〇二一—一〇六三）が夢で雪竇山に遊んだことに因んでいる。智鑑が詠じて半世紀余りを経た南宋後期に理宗が「応夢名山」の四字を御書し、ときの住持であった大慧派の偃溪広聞（仏智禪師、一一八九—一二六三）はその御書を石碑に刻んだとされる。広聞が石碑を立てた後に智鑑が詩偈を詠ずることはあり得ないが、おそらく仁宗の頃から何らかの御書亭の類いが存したものでなからうか。智鑑とは別に□鑑禪師があつて作詩したものと見るのは如何にも不自然であり、智鑑の詩偈の内容はあくまで仁宗の故事に因んで詠じられており、理宗の建てた御書亭のことは直接には触れられていない。智鑑が仁宗になむ応夢の因縁を詠じた一首と後に理宗の「御書亭」が結び付けられて収録されたものではなからうか。一応、ここでは「御書亭」と題される詩偈一首は実際には智鑑が仁宗の応夢の故事を詠じたものであつたが、同地に御書亭が建てられた後に関連付けられて「御書亭」の詩偈とされたものと解しておきたい。

また「入山亭」は寺から七里ばかり離れており、入山者の休憩地として北宋の至和二年（一〇五五）乙未に臨濟宗の達觀曇穎（九八九—一〇六〇）により建てられたものである。智鑑が詩偈を詠じた後、一世紀半を経て元代の元統三年（後至元元年、一三三五）乙亥に至って大慧派の石室祖瑛（一二九—一三四三）がこれを新たに修復して「雪竇山亭」と名づけており、入山する修行僧にとってはまさに「雪竇禪関」として修行道場に入るための関門（玄関）となったわけである。

さらに『雪竇寺誌』卷三「橋」には、

錦鏡橋。僧喜記云、臨_レ壑駕橋、屋_二其上_一為_二三間、憑_レ檻以憩、遊觀_二飛流濺沫_一、為_二瀑水之偉觀_一。橋西為_二小屋一間、以祀_レ龍。元至正七年、大雨飄蕩、越二年、易為_二洞橋_一。高二十尺、由_レ堞至_レ中、可_二六十尺_一。今池已再湮再復、非_二復昔日寬廣_一。橋亦平与_二伏龍_一相似、又名_二虹橋_一。

鑑禪師詩云、光搖_二鼉鼉窟_一、勢接_二青山_一壯、四顧悄無_レ人、仰看天在_レ上。

光は鼉鼉の窟を揺らし、勢いは青山に接して壯なり。四顧するに悄として人無く、仰ぎ看るに天は上に在り。

として一首の詩偈が残されている。これは智鑑とも関わり深い錦鏡池に掛けた橋（虹橋）を詠じたものであり、説明文には橋の大きさなども記されている。同じく『雪竇寺誌』卷三「池」にも、

錦鏡池。宋淳熙十一年、足菴鑑公始開。深一尋、縱四百三十尺、広半_レ之。因_レ橋為_レ閘、視_二水漲落_一、而蓄洩_レ之。樓公鑰作_レ記甚詳。明初已湮為_レ田。嘉靖間、邑令錢公璿、始為_レ修復。隆慶間又湮、今縱広雖_レ不_レ及_レ前、然畧具_二空明之觀_一矣。

鑑禪師詩云、一鑑涵_二虚碧_一、万象悉其中、重緑浮_二輕緑_一、深紅間淺紅。

一鑑は虚碧に涵り、万象は悉く其中にあり。重緑は輕緑に浮かび、深紅に間に浅紅あり。

として智鑑が詠じた一首の詩偈が残されている。「綿鏡橋」と「綿鏡池」の詩偈は雪竇山の智鑑が淳熙十一年（一一八四）に開拓した綿鏡池と、これに架かる綿鏡橋（虹橋）に因むものである。綿鏡池は深さが一尋であり、縦が四三〇尺、横がその半分ほどであったと記されている。一鑑は一つの鏡、ここでは錦鏡池が鏡のごとく山や空を映し出しているさまをいう。

このほかにも『雪竇寺誌』卷九下「詩」の「五言絶句」には、

雲霞外。
积足菴。

山高不_レ見_二頂_一、樹密散_レ空翠、始欲問_二招提_一、更在_二雲霞外_一。

山高くして頂を見ず、樹は密にして空に散じて翠なり。始めて招提を問わんと欲するに、更に雲霞の外に在り。

清音洞。

一带_二無絃曲_一、高山流水声、家風雖_二冷淡_一、韻調出_二常情_一。

一たび無絃の曲を帯び、高山流水の声あり。家風は冷淡なりと雖も、韻調は常情を出づ。

という二首の詩偈が「积足菴」すなわち智鑑の作として載せられている。「雲霞外」は雲霧にかすむ雪竇山の招提（伽藍堂宇）

の様子を詠じたものであり、「清音洞」では山中の清音洞と称する洞窟に響く水滴の清音を無絃琴の調べと解して詠じている。

智鑑が詠じた頌古

『雪竇寺誌』卷五上「法要」の「足菴智鑿禪師」の項には「頌古」として、つぎのごとき「傳大士万象主」「劉鉄磨老牯牛」「洞山無寒暑」「徳山学畢」という四首の古則公案に対する智鑑の頌古が載せられている。これらの頌古も智鑑が詠じた詩偈として貴重なものがある。第一「傳大士万象主」の古則とは、

傳大士頌云、有_レ物先_二天地_一、無_レ形本寂寥、能為_二万象主_一、不下_二逐_二四時_一凋_一。

土面灰頭不染_レ塵、花街柳巷樂_二天真_一、金雞唱_レ曉瓊樓夢、一樹花開浩劫春。

というものである。傳大士すなわち傳翁（善慧大士、四九七—五六九）の「物有りて天地に先んず、形無くして本より寂寥たり、能く万象の主と為り、四時を逐うて凋まず」という詩偈に対して智鑑が詠じた頌古であり、つぎのごとく読み下すことができよう。

土面灰頭して塵に染まらず、花街柳巷にて天真を楽しむ。金雞は曉に唱う瓊樓の夢。一樹に花は開く浩劫の春。

泥や灰に塗れて利他行に努めながらも世間の塵埃に染まらず、自ら主人公（万象の主）として空劫已前のありようを生きたるさまが詠われている。

第二「劉鉄磨老牯牛」の古則とは、瀧仰宗祖の瀧山靈祐（大円禪師、七七一—八五三）の門下の尼僧として名声を馳せた劉鉄磨に因む因縁である。

瀧山見_二劉鉄磨来_一曰、老牯牛汝来也。磨曰、来日塙山大會齋、和尚還去麼。山乃放身作_二臥勢_一。磨便出去。

雲巢夢断月華秋、王女翻身過_二斗牛_一、卸却花冠_二歸_二旧隱_一、元途鳥道未_二容收_一。

老牯牛とは年老いた雌の牛の意であり、潭州（湖南省長沙府）寧郷県の大瀧山の靈祐が劉鉄磨を呼ぶ際の愛称なのである。劉鉄磨がやって来るのを見た靈祐は「老牯牛、汝来たるや」と声を掛けた。劉鉄磨が「来日は塙山の大会齋なり、和尚、還た去くや」と尋ねた。靈祐が身を横たえて卧する格好をすると、劉鉄磨はすぐさま出て行つた。智鑑はこの機縁に対して、

雲巢にて夢は断つ、月華の秋。王女は身を翻して斗牛を過ぐ。花冠を卸却して旧隱に帰れば、元途の鳥道、未だ容收せず。

という頌古を詠じている。雲巢に卧したのは瀧山靈祐であり、身を翻して立ち去る王女は劉鉄磨を指している。

第三「洞山万里無寸草」の古則是、曹洞宗祖の洞山良价（悟本大師、八〇七—八六九）の示衆として広く知られている。

洞山示衆曰、秋初夏末、兄弟或東去西去、直須向万里無寸草一処上去始得。又云、只如「万里無寸草」一処、且作麼生去。後有僧到瀏陽、拳似石霜。霜云、出門便是草。僧回拳似山。山曰、大唐国裏能有幾人。

虚元鳥道没_レ織埃、玉殿空然鎖_レ緑苔、挂_レ壁梭飛秋蛻_レ骨、滄溟老蚌_レ尽懷胎。

筠州（江西省）の洞山普利禪院で良价が夏安居（制中）の終わり（七月一五日の解夏）に「秋初夏末、兄弟、或いは東へと去り西へと去る、直須らく万里に寸草無き処に向つて去きて始めて得し」と示衆し、付け加えて「只だ万里に寸草無き処の如きは、且つ作麼生か去らん」と述べた。後に一僧が潭州瀏陽県に到り、石霜山崇勝寺の石霜慶諸（普会大師、八〇七—八八八）にこの話頭について問うた。このとき石霜慶諸は「門を出づれば便ち是れ草」と答えている。僧が洞山に戻つて良价に慶諸の答えを伝えると、良价は「大唐国裏、能く幾人か有る」と慶諸のことばを称えた。この「洞山万里無寸草」の古則に対して、智鑑はつぎのような頌古を詠じている。

虚元の鳥道、織埃没し、玉殿は空然として緑苔を鎖す。壁に挂る梭飛は秋に骨を蛻し、滄溟の老蚌は尽く懷胎す。

第二の頌古にも記される鳥道とは曹洞宗旨の「洞山三路」の一つで、鳥が飛ぶ空中の道のことであり、鳥の飛んだあとは何も消息を残さないことから、没蹤跡の悟りの境地を現している。

第四「徳山学畢」の古則是、雲門下の徳山縁密（円明大師）が上堂に述べたことばに因むものである。

徳山縁密禪師上堂。大衆及尽去也。直得三世諸仏口挂壁上、猶有一人呵呵大笑。若識此人、参学事畢。

青山は父白雲児、雲散青山総不知、玉兔昼眠雲母地、金鳥夜宿不萌枝。

縁密の上堂を書き下せば「大衆、及尽し去るや。直に三世諸仏が口を壁上に挂くるを得るも、猶お一人有りて呵呵大笑す。若し此の人を識らば、参学の事畢らん」となる。智鑑の詠じた頌古はつぎのように書き下せる。

青山は是れ父、白雲は児。雲は青山に散じて総て知らず。玉兔は昼に雲母地に眠り、金鳥は夜に不萌の枝に宿す。

智鑑は不動の青山と往来生滅する白雲を対比し、白昼に雲母に眠る玉兔（月）と深夜に不萌の枝に宿す金鳥（太陽）に準え、参学の大事を了畢した自己本来の面目のありようを詠じている。

一方、南宋代から元代に諸禅僧の頌古を古則毎に並べて編集した『禅宗頌古聯珠通集』にも、延祐五年（一三二八）六月旦に紹興路（浙江省）山陰県の法華山天衣万寿禅寺の前住であった錢唐沙門の魯庵普会が自序を付して増集した「続収」

や「増収」の部分に、智鑑の詠じた頌古も若干ながら収められている。『禪宗頌古聯珠通集』卷三「菩薩機縁」の「増収」に、
傳大士頌云、有_レ物先_二天地_一、無_レ形本寂寥。能為_二萬象主_一、不_レ逐_二四時_一調_上。
土面灰頭不_レ染_レ塵、華街柳巷染_二天真_一。金鷄唱曉瓊樓夢、一樹華開浩劫春。 足菴鑿。(卍統藏一一五・一八d)
という「傳大師万象主」の古則に対する智鑑の頌古が載せられている。『雪竇寺誌』のものは『禪宗頌古聯珠通集』から採用されたことが知られる。

『禪宗頌古聯珠通集』卷六「祖師機縁」の「西天諸祖」の「続収」に、

迦葉因阿難問、世尊伝_二金襴_一外、別伝_二何物_一。迦葉召_二阿難_一。難応諾。迦葉曰、倒_二却門前刹竿_一著。

倒_二却門前刹竿_一、全提那涉_二玄端_一。翻_レ身不_レ坐_二空王殿_一、月照_二千峯_一夜色寒。 足菴鑿。(卍統藏一一五・三二c)

という「阿難倒却刹竿」の古則に対する智鑑の頌古が収められている。これはすでに触れた道元の『宝慶記』の中で、

炷香拜問、世尊授_二伝金襴袈裟於摩訶迦葉_一、是何時耶。

堂頭和尚慈誨曰、你問_二這箇事_一、最好也。箇箇人不_レ問_二這箇_一、所以不_レ知_二這箇_一、乃善知識之所_レ苦也。我曾在_二雪竇先師處_一、
普問_二這箇事_一、先師大悦也。

という先師如浄と交わした問答商量の内容とも通ずるものであり、「阿難倒却刹竿」の古則を頌賛した智鑑の拈評として注目される。

『禪宗頌古聯珠通集』卷九「祖師機縁」の「六祖下第二世」の「続収」に、

江西道一禪師、時号_二馬祖_一(嗣_二南嶽讓_一)示_レ衆曰、汝等諸人、各信_二自心是仏_一、此心即是仏心。達磨南天竺_二国来_一至_二中

華_一。伝_二上乘一心之法_一、令_二法等開悟_一。有_レ僧問云、和尚為_二什麼_一說_二即心即仏_一。祖曰、為止_二小兒啼_一。僧曰、啼止後如何。

祖曰、非_レ心非_レ佛。僧曰、除_二此一種人來_一、如何指示。祖曰、向_レ伊道、不是物。曰、忽遇_二其中人來_一時如何。祖曰、且

教_二伊体_一会_二大道_一。

即心是仏外忘_レ求、心仏円明不_レ假_レ修。雲浄遠山千点翠、水和明月一天秋。 足菴鑿。(卍統藏一一五・五〇b)

という「馬祖即心是仏」の古則に対する智鑑の頌古が収められている。「即心是仏、外に求むることを忘じ、心仏円明にして修を仮らず。雲は浄し遠山千点の翠、水は和す明月一天の秋」とあり、この頌古も智鑑が修行と証悟をどのように捉えていたか、即心是仏の道理を窺う上で重要であろう。

『禪宗頌古聯珠通集』卷一三「祖師機縁」の「六祖下第三世之四」の「統収」に、

池州魯祖山宝雲禪師（嗣馬祖）師尋常見僧來便面壁。南泉聞曰、我尋常向師僧道、向下仏未出世一時上會取。尚不得一箇半箇。他恁麼驢年去。

背前後揚家醜、揭地洪音師子吼。分付仙陀一知不知、法身午夜藏北斗。足菴鑿。（卍統藏一一五・七四c）

という馬祖下の魯祖宝雲にちなむ「魯祖面壁」の古則に寄せた智鑑の頌古が載せられている。曹洞宗の黙照禪が大眾一如に僧堂で面壁を行ずることを旨としていることから、この頌古も智鑑の意図を窺う上で重要であろう。これら「阿難倒却刹竿」と「馬祖即心是仏」と「魯祖面壁」の三則を詠じた智鑑の頌古は『雪竇寺誌』には載せられていない。

『禪宗頌古聯珠通集』卷一五「祖師機縁」の「六祖下第四世之一」の「統収」に、

瀉山見尼劉鉄磨來。師曰、老特牛汝來也。磨曰、來日臺山大会齋、和尚還去麼。師乃放身作臥勢。磨便出去。

雲巢夢斷月華秋、玉女翻身過斗牛。卸却花冠一掃旧隱、玄途鳥道未容収。足菴鑿。（卍統藏一一五・九一a）

という「劉鉄磨老特牛」の古則に対する智鑑の頌古が載せられており、これは『雪竇寺誌』にも取り上げられている。

『禪宗頌古聯珠通集』卷一八「祖師機縁」の「六祖下第四世之五」の「統収」に、

趙州一日問南泉曰、如何是道。泉曰、平常心是道。師曰、還可趣向也無。泉曰、擬向即乖。師曰、不擬爭知是道。

泉曰、道不属知、不属不知、知是妄覺、不知無記。若真達不疑之道、猶如太虚廓然蕩豁、豈可強是非耶。師於言下悟理。

玄途不涉透離微、道合平常發上機。無影樹頭春色曉、金鷄啼在不萌枝。足菴鑿。（卍統藏一一五・一〇八a）

という「南泉平常心是道」の古則に対する智鑑の頌古が収められているが、この頌古は『雪竇寺誌』には載せられていない。

『禪宗頌古聯珠通集』卷二四「祖師機縁」の「六祖下第五世之五」の「統収」に、

洞山示衆曰、秋初夏末、兄弟或東去西去。直須向萬里無寸草処去始得。又云、只如萬里無寸草処、且作麼生去。

後有僧到瀏陽、拳似石霜。霜云、出門便是草。僧回拳似師。師曰、大唐国裡、能有幾人。

拳玄鳥道没纖埃、玉殿空然瑣緑苔。挂壁梭飛秋蛻骨、滄溟老蚌尽懷胎。足菴鑿。（卍統藏一一五・一四七d）

という「洞山万里無寸草」の古則に対する智鑑の頌古を収められている。この「洞山万里無寸草」に対する智鑑の頌古は『雪竇寺誌』にも載せられている。

『禪宗頌古聯珠通集』卷三五「祖師機縁」の「六祖下第八世之二」の「増収」に、

鼎州徳山円明縁密禪師（嗣雲門）上堂、大衆及尽去也、直得三世諸仏口挂壁上、猶有二人呵呵大咲。若識此人、
参学事畢。頌曰、

青山は父白雲児、雲散青山総不知。玉兔昼眠雲母地、金烏夜宿不萌枝。 足菴鑑。（卍続蔵一五・二三・d）

という「徳山諸仏口挂壁上」の古則に対する頌古が収められている。この「徳山諸仏口挂壁上」の頌古も『雪竇寺誌』に載せられている。

『禪宗頌古聯珠通集』には併せて八則の古則に対して智鑑が詠じた頌古が載せられているわけであり、『雪竇寺誌』はこの『禪宗頌古聯珠通集』から智鑑の頌古を抜粋掲載しているものである。智鑑は景勝を詠ずる詩偈にすぐれるとともに、古則公案に対する頌古も好んで詠じていたことが窺われる。

おわりに

明末清初に曹洞正宗の覚浪道盛（杖人、一五九二—一六五九）は『天界覚浪盛禪師語録』巻一一「贊」に、

第十二代、明州雪竇足菴智鑑禪師。

小児生縁太煞奇、母子俄然触密機、洗瘍伸出劈仏手、那得囊蔵此利錐。長蘆看明月、休公卻傍管。就中置毒果難逃、象山逐跡妖風絶。悟来肚大要吞人、再試岳林風愈烈。仏祖不奈你何、長汀且分半概。尊貴位中収不得、触処相逢笑不徹。主中主、誰敢別。丙丁吹滅火烧天、花雨滿城落金屑。（禪宗全書五九・二九九b）

という智鑑に対する仏祖贊を残している。その内容は「雪竇足菴禪師塔銘」を踏まえており、道盛は智鑑の伝記をかなりよく理解した上で智鑑に対する仏祖贊をまとめている。ただし、道盛も足庵智鑑—長翁如浄—鹿門自覚という北地曹洞宗（曹洞正宗）の師資相承を覆してはおらず、中国曹洞宗祖の洞山良价（悟本大師、八〇七—八六九）の「第一代、筠州洞山悟本良价禪師」から本師晦臺元鏡（湛靈、一五七七—一六三〇）の「第三十二代、建州武夷東苑晦臺元鏡禪師」までの「洞宗」の歴代祖贊を残している。³³⁾

また同じく曹洞正宗の湛然円澄（散木道人、一五六—一六二六）の高弟である三宜明孟（愚庵、一五九九—一六六五）も『三宜孟禪師語録』巻九「仏祖歴伝像讚」に、

四十九、雪竇足菴智鑑禪師。

図面自_レ天開、山僧独怡悦、瀑布落_二千尋_一、仙音広長舌。象骨山深百怪興、老僧不_レ采_二徒輕襲_一。夜来独自上_二峻嶒_一、海濤一捲驚三澗。果是明星也誘_レ人、誰道世尊証_二寂滅_一。憶我孩提時、曾解_レ吞_二熱鍊_一。世尊有_二密語_一、迦葉不_二覆藏_一、一夜落花雨、滿城流水香。山高不_レ宜_二久立_一、且歸_二方丈房_一。(禪宗全書五四・六一九b~六二〇a)

という智鑑に対する像贊を残している。明孟の場合も如浄―自覚という相承説に基いている。

一方、日本でも『永平寺史料全書・禅籍編』第二卷(平成一五年一二月、大本山永平寺刊)や『二百四十回小遠忌記念』永福面山禅師宝物集』(平成二〇年九月、永福会刊)によれば、永平寺には江戸中期に面山瑞方(永福老人、一七八三―一七六九)が贊を付した「震且諸祖頂相贊」二四幅が残されており、その中に「雪竇足菴智鑑禪師」と題して、

雪竇足菴智鑑禪師。

滁州英物、族姓是呉。幼兮知_二我手似_二仏手_一、長兮喜_二俗顛_一、變_二真顛_一。雖_レ嗣_二大休于太白_一、本依_二寂菴於長蘆_一。道力如_二金剛_一也、象山百怪不_レ能_二撼動_一。智照似_二藻鑑_一也、雪竇千柄悉皆感孚。世尊迦葉兮一代秘密、落花流水兮千古範模。



面山瑞方贊「雪竇足菴智鑑禪師画像」

紙本著色 一幅 江戸時代

縦 128.2cm、横 50.5cm

大本山永平寺所蔵「震且諸祖頂相贊」二四幅の一

乙丑中秋、遠孫若之吉祥林比丘瑞方、焚香拜題。「吉祥」「瑞方」「面山」(永平寺史料禪籍二・五七頁)

と記されている。内容は『五家正宗贊』の天童宗珙の章や『五燈会元』の雪竇智鑑の章を受けて著されている。この仏祖贊は乙丑中秋すなわち延享二年(一七四五)八月一日に若狭(福井県)の無量寿山吉祥林空印寺で揮毫されており、面山瑞方が限られた史料を著実に読みこなし、智鑑に寄せる思いを綴っていることが伝わってくる。その反面、もし瑞方が「雪竇足菴禪師塔銘」の存在を知っていたならば、この祖贊の内容もかなり相違したものになっていたと推測される。³⁴⁾

雪竇山資聖寺(雪竇寺)の現状については、引田弘道・呂其俊「現代中国の仏教教育機関―浙江仏学院を中心として―」(愛知学院大学『禅研究所紀要』第四六号、二〇一八年三月)に詳しい。

生前の智鑑は法孫に入宋求法僧の道元が輩出し、その法統がやがて異郷日本の地で広まることなど想像だもしなかったであろう。ただ、智鑑の在世中にすでに叡山覺阿(一一四一―?)や明庵栄西あるいは大日房能忍の門人など日本僧が江南の地に赴き始めている。明州鄞県の天童山景德寺では栄西が住持の虚庵懷敏に参学嗣法しており、同じく鄞県の阿育王山広利寺では能忍門下の練中・勝弁が住持の拙庵徳光に能忍の偈頌を呈して印可証明を受けている。とりわけ雪竇山はすでに触れたごとく天童山や阿育王山とともに明州を代表する名刹として広く知られていた。智鑑が雪竇山など明州地内の諸禅刹に化導を敷いたことが後に道元が如浄と触れ合う遠縁となっている。南宋代から元代の曹洞宗が明州を中心に辛うじて宗勢を保っていたことが曹洞宗の東伝、日本への伝来を可能にし得た理由の一つであったといつてよい。

雪竇山に立石されたであろう「雪竇足菴禪師塔銘」の石碑や、智鑑の墓塔である「足菴和尚塔」とその塔頭、あるいは智鑑が詠じた『雪竇雜詠三十首』の写本や刊本などが現今に残されていたならば、多くの貴重な状況を窺い知ることができたはずである。

智鑑のような人物のもとから如浄が育成され、さらに如浄の薰陶を受けて道元が輩出している。智鑑の仏法は雪竇智鑑―天童如浄―永平道元と師資相承され、遠い日本の地で開花して日本曹洞宗として現今に及んでいる。智鑑が示寂して三〇余年後に入宋した道元がもし在宋中に雪竇山を拝登していたならば、智鑑の塔頭や墓塔のみでなく、楼鑰が記した「雪竇足菴禪師塔銘」を仰ぎ見ることができたはずなのが惜しまれる。永平道元―孤雲懷奘―徹通義介―瑩山紹瑾―明峯素哲―祇陀大智と嗣承する道元派下の大智は、智鑑が亡くなって一二〇余年の後に入元し、在元中に雪竇山に赴いて足菴和尚塔を仰ぎ拝している。道元派下の曹洞禅者で雪竇山を訪れた人が大智のほかには知られないことから、大智の雪竇山拝登が

如何に稀有なる事跡であつたかが改めて俾ばれよう。³⁵ 日本の曹洞宗で入宋あるいは入元した禅者の誰かが雪竇山で智鑑の頂相や墨蹟などゆかりの品を得て直に日本に請来してくれていたならば、より多くの貴重な事実が判明したことであろう。

ちなみに私が駒澤大学中国仏教史蹟參觀団の一員として奉化の雪竇寺を訪れたのは、昭和六〇年（一九八五）九月七日のことであり、その当時は僅かな建物を残すのみの状況であつた。その詳細は『中国仏蹟見聞記』第七集（昭和六一年（一九八六）八月発行）に載る「行程記録」に詳しい。その後、雪竇寺では伽藍の再建が進み、現在はは大伽藍を誇つて多くの住僧を抱えている。

本稿を作成するに当たり、滋賀県甲賀市の MIHO MUSEUM から伝・老牛智融筆「牧童図」のデータ資料の提供と掲載許可を受けた。また、東洋大学大学院の張戦勝氏（法名は崇晃）を介して寧波市奉化区の雪竇寺の法恩法師より往古の雪竇寺伽藍等の写真の提供を受けた。さらに福井県の大本山永平寺からは面山瑞方賛「雪竇足庵智鑿禪師画像」の掲載許可を受けた。併せて感謝申し上げる次第である。

【註】

(1) 岡両画に関しては、古く島田修二郎「岡両画(上)」、『美術研究』第八四号、一九三八年（二月）と同「岡両画(下)」、『美術研究』第八六号、一九三九年（二月）が存し、後に『中国絵画史研究（島田修二郎著作集2）』（中央公論美術出版、一九九三年三月）にも「岡両画」として収められている。

(2) 智融の伝記記事に関しては杭州靈隱寺の寺志である『増修雲林寺志』卷三「禅祖」にも「僧智融」として、僧智融、俗姓邢、名澄。世居京師、以医入仕。南渡居臨安萬松嶺、号草庵邢郎中。官至成和郎、出禁庭、賞賚殊渥。年五十、棄官謝妻子、祝髮入靈隱寺。諸公貴人、挽之不可。又游諸方、徑山・康廬

經行殆遍。聞靈山之勝、遂投迹為終焉計。独行独坐、或至移晷。人不_レ知其能_レ画也。山深多_レ蛇、忽作_二奇鬼于壁_一、一吹_レ火向_レ空、一踢_レ蛇而掣_二其尾_一。蛇患遂除。遇_二其適_レ意_一、嚼_レ蔗折_レ草、蘸_レ墨以作_二坡岸巖石_一、尤為_二古勁_一、間作_二物象_一、不_レ過_二數筆_一、寥寂蕭散、生意飛動。作_レ詩不_レ多_レ、語意清絕。每自言、若_レ得_レ為_レ僧三十秋、瞑目無_レ言万事休。紹熙四年五月日卒、寿八十、僧臘如_二師言_一。とあり、また『新統高僧伝四集』卷六一「雜識編」にも「南宋臨安靈隱寺沙門釈智融伝」として智融の事跡が収められている。しかしながら、やはり智融が智鑑との関わりを持った点については触れられていない。

(3) 『叢林盛事』卷上「懶菴枢和尚」の項に、

懶菴極和尚、黃龍下尊宿、承_二嗣道場慧_一。初孝宗皇帝雖_レ向_二弘乘_一、未_レ知_レ有_二宗門下奇特事_一。皆是此老引進。故_レ踏_二堂_一・拙菴、然後印_二可_レ之_一。要_レ知_レ其來歷、皆極之力也。極謝_二事靈隱_一、後居_二于明教永安蘭若_一、逍遙自適。（己統藏一四八・三六 a ~ b）

とあり、『五燈会元』卷一八「臨安府靈隱懶庵道極禪師」の章にも、
臨安府靈隱懶庵道極禪師、吳興四安徐氏子。初住_二何山_一、次移_二華藏_一。隆興初、詔居_二靈隱_一。孝宗皇帝召至_二內殿_一、問_二禪道之要_一。（中略）後退_二居明教永安蘭若_一、逍遙自適。有_レ偈題_二于壁_一曰、雪裏梅華春信息、池中月色夜精神、年來可是無佳趣、莫_レ把_二家風_一舉_中似人_上。淳熙丙申八月、示_二微疾_一、書_レ偈而逝。塔_二于永安_一。（己統藏一三八・三六〇 c ~ d）

と記されている。黃龍派の無住居慧の法を嗣いだ懶庵道極（?—一一七六）が隆興年間（一一六三—一一六四）の初めに詔により杭州靈隱寺に遷住し、孝宗（趙口、字は元永、一一二七—一九四、在位は一一六二—一一八九）の帰依を得ていることが知られる。道極が靈隱寺に入寺した頃に、智融は靈隱寺に投じて出家剃髪していることから、智融という法諱（僧名）は靈隱寺で道極から付与されたものではないかと推測される。ちなみに『叢林盛事』によれば、道極が法を説いて孝宗を弘乗に向わせる切っ掛けを作り、これを受けてやがて楊岐派の踏堂慧遠（弘海禪師、一一〇三—一一七六）や大慧派の拙庵德光（弘照禪師、一一二一—

一一〇三）が孝宗を接化し、孝宗に印可を与えたのだと記している。

(4) 楼鑰の『攻媿集』卷八一「偈頌」に、

題_二老融画_一「弥勒」。

乘_レ風欲_レ去_二東南_一、回_レ頭此意誰參。當時踈_二過足菴_一、卻_二來攻媿_一同_レ龕。

という智融作「弥勒画像」に寄せた題跋が載せられており、これがかつて智鑑の所持していた智融作「弥勒菩薩画像」一軸に対して楼鑰が詠じた偈頌である。そこに「当時、足菴を踈過し、攻媿に却来して龕を同じくす」と記されており、智融が智鑑と知遇を得ていたこと、楼鑰が両者の全身を同じ龕（墓塔）に納めたことを窺い知ることができる。『攻媿集』卷八一「贊」には「南山律師贊」「靈芝律師贊」「哲老真贊」「湖心竹谿政講師贊」「鑑堂听老贊」「瑞巖益老贊」「涂毒策老贊」「雪菴瑾老贊」「英老真贊」「寿上人真贊」「瞎堂遠老真贊」「円覚菴澄師真贊」などを収めるが、智鑑や智融に対する真贊は存しない。

(5) 伝・老牛智融筆「牧童図」紙本墨画一幅が南宋時代の作として、滋賀県甲賀市信楽町田代桃谷の MIHO MUSEUM で二〇〇九年七月から八月に夏季特別展「仏たちの物語」の「禅の世界」に展示されている。この図は牛を牽く牧童の姿を描いたものであるが、伝智融作と伝えられるものの、真に智融の描いた絵なのか否かが定かでない。

(6) 『北磻文集』卷七「題跋」の「跋「雪竇老融牛軸」」に、
画_レ牛至_二戴嵩_一、能事畢矣。雪竇老融、則又出_二於規矩準

繩之外、春晴自牧、如超方之士、得友得師、心平氣定。有日新之功、露地而眠、則飽道足學。片石深雲、燕晦自若、不動声氣、物来斯応。新生之特、不受控制。一方解衣盤礴。想像乎尋牛訪跡、其既成也、庶幾乎人牛兩忘。已而不復自惜、与好事者共之。不見筆墨畦畛、則又何以異。夫軛位回機、聖凡所不能測。或者以秀閑西讓龍眠之說、繩之、不直老子一笑。

とあり、北磻居簡は智融が雪竇山で描いた牛図の軸に跋文を寄せている。ただし、文中に出てくる秀閑西については如何なる禅者なのか定かでない。同じ『北磻文集』巻七「題跋」の「跋老融散聖画軸」(「普化・金華・蜆子」)には、

自「普化・金華」至「蜆子」凡十輩、意緒情態、皆不「失」
「伝記所」載。非「高懷逸想、經營盤礴、不「見」筆墨畦畛、
若「老融自成」一家者、未「易」摸写。曩留「四明」最久、
間得「之」。好事者輒取去。今僅存「穀觶」一紙。議者以「其
微茫淡墨不「足」以永久。遂目「之」曰、罔「兩画」。行輩中寿
此山、一時名徳、作「詩尚」奇淡、時号「梵語詩」。良金華
玉市有「定価」。浮俗不「知也」。因書「融卷後、解嘲」云。
とあるから、智融は鎮州普化・金華俱胝・京兆蜆子といつた禅門の散聖画も得意としていたようである。なお文中に出る「寿此山」とは、居簡と同時代の楊岐派の此山師寿(一一八一—一二五二)のことである。同巻一〇「祭文」の「達首座索生祭文」にも「嘉定十二年良月十六、靈隱達老宿致「雪竇老融」所作「穀觶」索「生祭」」とある。

(7) 『虚堂和尚語録』巻一〇「偈頌後録」に、

足庵智鑑と『雪竇足菴禪師塔銘』(下) (佐藤)

墨戲屠生善「老融牛」。

草木伝「真筆力高、戴嵩牛在」秋毫。此行莫「擬」天台去、
忍「作」孤僧過「石橋」。(大正蔵四七・一〇五九b)

という偈頌が伝えられている。墨戲の妙を得た屠生という人物が智融の牛図を巧みに画いたという内容である。

(8) 破庵派の希叟紹曇は『希叟和尚語録』「偈頌」に、

題「老融羣牛図」。

三三五戲「平蕪」、踏「裂」春風「百草枯」。莫「写」瀉山僧某
甲、「恐人悟作」祖師図。(「正統蔵」一一二・九二a)

老融の群牛図に題す。

三三五五、平蕪に戯れ、春風を踏裂して百草枯れる。瀉山僧某甲と写すこと莫かれ。恐れらくは人の悟りて祖師図と作さん。

という智融(老融)の「群牛図」に寄せた賛を載せており、これは『江湖風月集』にも「蜀希叟曇和尚」の「題「群牛図」」として載せられている。ただし、同じ紹曇の『希叟和尚広録』巻七「題」では「題「直夫牛図」」(「正統蔵」一一二・一五四c)として同文を載せており、ここでは智融ではなく胡直夫の描いた「牛図」と伝えている。また『希叟和尚広録』巻六「題」にも、

題「初上人老融牛軸」。

善画無「規」、真牧無「迹」。放「開線路」、柳烟披「扞」。
草蒙「茸」。本地風光、一何欠少。若作「境会」、当「仁」
徒費「精神」。具「正眼」看、老融無「下」手処。(「正統蔵」一一二・一四三b)

という題語が存し、□初上人が所持していた智融の「牛図」一軸に題語を書している。同じく『希叟和尚広録』巻七「題」には「題直夫牛図」につづいて智融の作に対して、

題「老融猿」〈枝上坐、拳し手捫し果。〉

危「坐禅枝」冷、機含「毒果」深。直饒捫摸著、未「必死」偷心。（正統藏一二二・一五四c）

という題語を残しており、猿が枝の上に坐して手を伸ばし果実を採る姿を描いた「猿図」であったことが知られる。このように智融は牛や猿など動物画および仏祖や聖人などの散聖画を得意とした画僧であったことが改めて窺われる。

- (9) 根津美術館編『南宋絵画―才情雅致の世界―』（平成一六年（二〇〇四）四月刊）に伝・胡直夫筆「夏景山水図」一幅と、大慧派の浙翁如琰（仏心禅師、一一五一―一二二五）が賛を寄せた胡直夫のものか定かでない「馬郎婦觀音図」一幅と、如琰の法嗣の偃溪広聞（仏智禅師、一一八九―一二六三）が賛を寄せた伝・胡直夫筆「布袋図」一幅が載せられている。

(10) 史浩（字は直翁、号は真隱、魏公、一一〇六―一一九四）は明州鄞県の出身であり、紹興一四年（一一四四）に進士となり、昇進して隆興元年（一一六三）に尚書右僕射となり、孝宗の信認を得た。一時、官を辞したものの、淳熙五年（一一七八）に右丞相に任ぜられ、淳熙二〇年（一一八三）には太保・魏国公に封じられた。紹熙五年（一一九四）四月五日に八九歳で死去している。諡は文惠・忠定、封号は魏国公・会稽郡王・越王と称される。『宋史』巻三九六

「列伝第一五五」の「史浩伝」や『宋史全文』隆興元年五月条に伝が存する。著作に『鄞峯真隱漫録』五〇巻があり、五山十刹制度に関わつたとされる史彌遠（字は同叔、一一六四―一二三三）は史浩の子である。「瑞巖石隱禪師塔銘」にも「公卿名士、為「方外交」者甚衆。丞相魏公、晚歲与「師尤厚。嘗嘆曰、自得如「深雲中片石」、石窓則空門中御史也。緇流以為「名言」と記されている。このほかに史浩は天台宗の覺雲智連（志連とも、文秀、一〇八八―一一六三）や柏庭善月（光遠、一一四九―一二四二）などとも交流が深く、「仏法金湯編」巻一四「南宋」の「史浩」の項に、

浩字直翁、四明人。孝宗朝拜「相、封「衛国公」、又封「越王」。淳熙乙巳、掛「冠帰「四明」、自号「真隱居士」。每從「南湖智連法師」問「法要」、乃於「東湖」創「月波楼」、做「補陀巖」、結「洞室」、以安「大士」。浩過「金山」、覽「梁武儀範之盛」、謂「報恩度世之道在「是」。乃於「月波山」創「殿」、設「二十佛像」、与「三名僧」講究制「儀文四卷」行「於世」。公之子彌遠、相「寧宗」封「衛王」。衛王之子字之、觀文殿大學士。彌忠之子嵩之、相「理宗」。衛王建「明州七山寺觀」、沿「途接待」。浩嘗撰「南湖法智大師像讚」曰、靈山一席、儼在「天台」。後十三葉、復生「奇材」。唱「道四明」、講肆宏開。溥海声聞、欲欲雲雷。章聖在御、中使鼎來。得「法大旨」、皇皇恢恢。錫「号法智」、宸章昭回。祇今後学、咸仰「崔嵬」。蘭馨菊芳、本「一根荻」。嗚呼、是為「法宇之柱石」、教鼎之塩梅。一宜茲幻影経「千古」而無「塵埃」。〔宋史并統紀〕。（正統藏一四八・四八三b~c）

とまとめられており、史浩と史氏の流れや趙宋天台の四明知礼(約言、法智大師、九六〇—一〇二八)の画像(頂相)に寄せた贊のこと、明州(四明)南湖延慶寺の覺雲智連との関わりなどについて記されている。史浩に関する考察としては、佐藤成順『宋代仏教史の研究』(山喜房仏書林、平成二四年三月)に「南宋の宰相史浩の補陀落山観音信仰について」と「南宋の宰相史浩の天台僧外護と功德寺造営について」の論考が収められている。

(11) 『雪竇寺誌』卷六上「祖塔」の「足菴鑑禪師」の項に「嘉泰二年三月初四日示寂、建塔於寺後東山側」という記載が存している。足庵智鑑とは別に足庵口鑑という禪者が存し、嘉泰二年(一一〇二)三月初四日に示寂し、墓塔が寺後東山側に建てられたと伝えている。しかしながら、この記述に関しては、きわめて錯綜した唐突なものがあり信じ難い内容といえよう。

(12) 善導(終南大師、光明寺和尚、六一三—六八二)は中国浄土教の祖師であり、泗州(安徽省)夏丘県または青州(山東省)臨淄県の朱氏に生まれたとされる。幼くして出家し、長安(陝西省)の終南山悟真寺に入門する。貞観一五年(六四二)に晋陽(山西省)の道綽(西河禪師、五六二—六四五)を訪ねて師事し、『観無量寿経』の教えを受け、称名念仏を中心とする浄土思想を確立した。著述に『観無量寿経疏』四卷、『往生礼讚』一卷、『法事讚』二卷、『般舟讚』一卷、『観念法門』一卷などが存する。『宋高僧伝』卷一〇「習禅篇」の「唐洪州開元寺道一伝」に「山門子来、財施如」

積。邑里僧供、飯香普熏。自昔華嚴歸真於嵩陽、善導瘞塔於秦嶺、礼視齋斬、人傾国城、哀送之盛、今則三之」(大正藏五〇・七六六a)とあり、馬祖道一の葬儀が盛んであったさまを北宗禅の嵩山普寂(華嚴尊者、大照禪師、六五一—七三九)や浄土教の善導のそれに比している。

(13) この点、西谷功『南宋・鎌倉仏教文化史論』(勉誠出版、二〇一八年二月)の「日宋間の人的交流とその場」では、俊芴が雪竇山で参学した住持を「思岳禪師」と解し、大慧宗杲の法嗣である蒙庵思岳のことと推定(同書、一五八頁)している。しかしながら、『大慧普覚禪師語録』卷六に所収される張浚(字は徳遠、諡は忠獻、一〇九七—一一六四)が撰した「大慧普覚禪師塔銘」に、

僧俗從師得法悟徹者、不啻數十人、皆有聞于時。鼎需・思嶽・彌光・悟本・守浄・道謙・遵璞・祖元・冲密、先師而卒。(大正藏四七・八三七b)

とあり、大慧宗杲が隆興元年(一一六三)八月に示寂する以前、師匠宗杲に先んじて逝去した高弟として懶庵鼎需(一〇九二—一一五三)・晦庵弥光(光状元、?—一一五五)・大円遵璞(?—一一六〇)らと並んで思嶽(思岳)の名も挙げられている。俊芴が杭州余杭県の径山興聖万寿寺で参学した蒙庵元聡と同じく思嶽も「蒙庵」の道号を用いていたことから、両者に錯綜が存したものである。いずれにせよ、俊芴が入宋当初に雪竇山で参学した住持を大慧派の蒙庵思嶽とする可能性は存しない。

(14) 祇陀大智の在元中の動向全般については、佐藤秀孝「大

智禪師の在元中の動静について「駒沢大学中国仏教史蹟参観団編『中国仏蹟見聞記』第七集、昭和六〇年（一九八五）八月）に詳しい。

(15) 水野弥穂子『日本の禅語録』大智』（講談社、昭和五三年（一九七八）二月）では、この偈頌をつぎのように現代語訳している。

足庵和尚の塔を礼拝む。

足庵智鑑大和尚 雪寶山の乳峰に洞山の宗風唱起げ、金線玉針ぬい鎖し、事実も道理も完全じや。一夜、丙丁童子が火を吹き消して、三千世界の海嶽は、煙の如くまっ黒じや。（二七一頁）

さらに水野氏は解題として、つぎの¹⁾とく記している。

天童如浄を如浄ならしめた雪寶智鑑である。如浄は又、入滅の時までその嗣承を明かさなかったという。みだりに嗣承を唱えて名聞とした当時の禪者の風をいさぎよしとしなかったのである。永平の児孫として、足庵雪寶禪師にはなみなみならぬ親しみがある。さすがに大智の大元滞在が長いだけのことはあった。丙丁童子は火の神の子。則監院はそれによって悟ったが、徳山はその火を吹き消したところで悟った。三千の海嶽、黒くして煙のごとしとは、一切法が仏法一色になったことをいう。（二七一頁）

(16) 『人天眼目』卷三「曹洞宗」の「要訣（山堂淳）」に、新豊一派、荷玉分^レ流、始因^レ過^レ水逢^レ渠、妙見^レ無情說法。当今不^レ触、展^レ手通^レ玄、列^レ五位正偏、分^レ三種滲漏。一夜簾外、臣退^レ位以朝^レ君、古鏡臺前、子転^レ身而就^レ父。

雪覆^二萬年松径^一、夜半正明、雲遮^二一帶峯巒^一、天曉不^レ露。道枢綿密、智域困深。默^二照空劫已前^一、湛湛^二一壺風月^一、坐^二徹威音那畔^一、澄澄滿目烟光。不^レ萌枝上花開、無影樹頭鳳舞。機絲不^レ挂、箇中双鎖^二金針^一、文彩縱橫、裏許暗穿^二玉線^一。双明唱起、交^レ鋒処知^レ有^二天然^一、兼帶忽來、枯木上須能作^レ主。不^レ存^二正位^一、那守^二大功^一。及^レ尽^二今時^一、寧容^二尊貴^一。截^二斷情塵見網^一、掣^二開金鎖玄關^一。妙協全開、歷歷類中混^レ跡、平懷常実、明明炭裏藏^レ身。卷舒不^レ落^二功勳^一、來去了為^二變易^一。欲^レ使^二異苗蕃茂^一、貴在^レ深^二固靈根^一。若非^二柴石野人^一、爭見^二新豊曲子^一。（柴石野人、浮山円鑑之別号也）。（大正蔵四八・三三〇c・三二一a）

とあり、曹洞宗旨にも精通した黄龍派の山堂徳淳が曹洞宗の要訣として「双鎖金針」などの語を用いている。

(17) 「一夜丙丁吹火滅」の語は『景德伝燈録』卷二五「金陵報恩院玄則禪師」の章に、

金陵報恩院玄則禪師、滑州衛南人也。初問^二青峯^一（有本云^二白兆^一）、如何是仏（有云^二自己^一）。青峯曰、丙丁童子來求^レ火。師得^二此語^一、藏^二之於心^一。及^レ謁^二淨慧^一、詰其悟旨。師対曰、丙丁是火而更求^レ火、亦似^二玄則將^レ仏問^レ仏。淨慧曰、幾放過^二元來錯會^一。師雖^二蒙^レ開筵^一、頗懷猶豫。復退思、既殆莫^レ曉^二玄理^一。乃投^二誠請益^一。淨慧曰、汝問我^レ与^レ汝道。師乃問、如何是仏。淨慧曰、丙丁童子來求^レ火。師豁然知^レ帰。（大正蔵五一・四一三b）

とある報恩玄則が青原下の青峰伝楚や法眼宗祖の法眼文益（淨慧禪師、大法眼禪師、八八五—九五八）と交した「丙

「童子来求_レ火」の問答に因む。すでに触れたごとく「雪竇足菴禪師塔銘」に、智鑑が閑庵嗣宗（宗白頭）と交した問答として、

聞_二翠山宗白頭機鋒峻峭、往叩_レ焉。時師方為_二岳林行乞、担_二布囊、隨_レ得即受。備歷艱勤、人所_レ不堪。宗云、為_レ衆竭_レ力、不_レ無_二其勞_一。師云、須_レ知_二有不_レ勞者_一。宗云、尊貴位中收不_レ得時如何。師云、触_レ処相逢不_二相識_一。宗云、猶是途中賓主、作麼生是主中主。師云、丙丁吹滅_レ火。宗以_レ手掩_二師口_一。師払袖出。

とあり、ここにいう「丙丁吹滅_レ火」の語句を踏まえて大智が書き記したのであれば、智鑑の墓塔を拝した大智はその傍らに立石されていた「雪竇足菴禪師塔銘」を實際に眺めていたのかも知れない。

(18) 『虚堂和尚語録』卷一〇末尾に載る閑極法雲（間叟、一二一五―？）が撰した「行状」によれば、

由_レ是回_レ浙到_二浄慈_一、見_二浄和尚_一。浄問云、爾還_三知_二所生父母通身紅爛在_二荊棘林中_一麼。師云、好事不_レ在_二忽忙_一。浄隨後打一拳。師展_二両手_一云、且緩緩。（大正藏四七・一〇六四 a）

とあり、浄慈寺の如浄が会下に到った智愚に「爾、還た所生の父母、通身紅爛して荊棘林中に在るを知るや」と問い掛けているのも興味深いものがある。

(19) 『四明山志』卷二「伽藍」の「仗錫延勝寺」の項に、唐龍紀元年、石霜下長政_二僧肇_一基。天祐三年、吳越王賜_レ金額_二十伝_一。宋之天聖四年、修己自_二太白山_一来主_二寺

足庵智鑑と『雪竇足菴禪師塔銘』（下）（佐藤）

事、人奉_レ之為_二第一代祖_一。宝元二年、敕名_二仗錫延勝院_一。伝_二五十二代_一、至_二元末_一。

と記されている。棘林杞の名は存していないが、元末までに仗錫延勝寺の住持は第五二代を数えたとされ、その住持のひとりに棘林杞も名を連ねていたことになる。

(20) 『虚堂和尚語録』卷六「仏事」には、

棘林請為_二沙弥_一付_レ衣。

做_レ処_二纈密_一、且非_二割截而成_一。転_レ手付来、暗合_二宝鏡三昧_一。二子頂受、是真克家。（大正藏四七・一〇三三 c）

という二人の沙弥に衣（袈裟か）を付した記事が存するから、棘林杞にはいまだ正式の比丘でない未受具の弟子（沙弥）がいたことが知られる。

(21) 大慧派の無文道璨は『無文印』卷五「塔銘」の「天地雪屋韶禪師塔銘」にて、

築_二菴山阿_一、鑿_レ池引_レ泉、環_二以_二幽花細竹_一、夷_二猶其間_一、以_レ遂_レ所_レ樂。端明厲公文翁、為_レ扁曰_二明月_一。

と伝えている。雪屋正韶（一一二〇―一一二六〇）は天童山の如浄の法を嗣いでおり、智鑑の法孫に当たっている。廬山の天池寺に住持した正韶は自然の風光をこよなく愛し、天池峰の山阿に自ら池を堀り泉を引いて庭園を造り、一隅に居所として明月庵を創建している。こうした正韶のありようも法祖智鑑の気風を受け継いでいるとも解されよう。正韶については佐藤秀孝「雪屋正韶と廬山天池寺―天童如浄が晩年に道元とともに育成した嗣法門人―」（『愛知学院大学禅研究所紀要』第三九号、平成二三年（二〇一一）三

月) および同「雪屋正韶と廬山天池寺―天童如浄の法を嗣いで同調せず―」(曹洞宗総合研究センター『學術大会紀要』第一二回、平成二三年七月)を参照。

(22) 日本でも京都市右京区の大雲山龍安寺(臨済宗妙心寺派)は枯山水の石庭(世界遺産)として有名であるが、これとは別に境内には鏡容池と称される池も存している。鏡容池の名の由来は、明鏡のように水面に水辺の草花や木々が鮮明に映し出されることに因んでおり、とくに秋の紅葉のときや冬の雪景色の光景などは絶景とされる。おそらく雪竇山の錦鏡池もこれと同様の発想に因んで作庭されたといつてよいだろう。

(23) 『雪竇寺志略』「文」の「記」にも「錦鏡池記」として、雪竇山名_二天下_一、自_レ下而升。既至_二絶頂_一、其地始平曠、四山又環_レ之。寺據_二正中_一、氣象雄秀。一水出_レ山之両腋、而会_二于前_一、径赴_二大壑_一、峻石削立、險不可_レ測、崩_レ空落_レ崖。飛雪千丈、恫心駭目、絶勝_二此方_一。此山之所_二以得_レ名也。紹興甲子、郡太守莫公将来游、乃始發_二意於万象之表_一、謂_二水去_二太極_一、属_二寺僧_一以_レ田為_レ池、使_二三流匯_二其中_一。寬納而緩出_レ之、則寺当_二少利_一。有_レ詩曰、能廢_二千畦_一、停_二玉雪_一、不_レ妨_二飛練挂_二卅梯_一。誦者聽_レ之。而四十餘年、十易_二主人_一、咸睥睨以為_レ難。淳熙十一年、足菴鑑公禪師既至、百廢修葺、取_二莫公之說_一、斟_二酌之_一。八月己未、遂興_二畚鍤_一、池深一尋、縱四百三十尺、広半_レ之。築_二隄西南_一以便_二往来_一、因_レ橋為_レ閘、視_二水漲落_一而閉_二泄之_一。明年二月庚子、池成。漪漣拍_レ隄、滄瑩如_レ拭、千巖倒影、空明相

映。禽魚上下、咸有_二喜色_一。問_二名於張武子良臣_一、武子曰、是所謂淵林錦鏡者也。遂以_二錦鏡_一名、而請_二余記_レ之。余不能_レ習_二陰陽家言_一、然通_二天下一氣_一耳。山如_二人之定形_一、水如_二人之脉絡_一、或滯或泄、当_二適_二其中_一。池之未_レ作也、水若_レ建_レ瓶、山之氣与_レ之俱逝而不_レ留。及_二其既積_一、則靈淑之氣、得_二以扶輿磅_二礴於茲_一矣。繼自_レ今、其必有_二卓然超徹之士_一、深藏若_レ虛、出_二於此山_一、以振_二祖風_一者、豈惟利而已哉。曩嘗一再游焉、間久不_レ雨、水僅相統、蕭索輪困、固自不_レ異、惟積雨暴漲、壯偉可_レ觀。顧安得_二每如許_一、及_レ今過_レ之。既坐_二亭上_一、徐撤_二二板_一、水則大至、怒濤迅雷、凌_二駕震豐素蛻數万_一、咆哮層出、真天下之奇觀也。始惟見_二寒莎野卉_一、紛駭相映。少焉見_二両崖石壁_一、亦為低昂不_レ已、此非_二親至_二其上_一、深蹟而駐觀者、不_レ足以知_レ此。莫公止謂、不_レ妨_二飛雪之勝_一、不_レ知此池之成、乃大有_レ功_二於瀑泉_一也。足菴鑑公、伝_二洞山心宗_一、精鍊刻苦、慈仁接物、法施不_レ吝。所_二向傾動_一、晚坐_二道場_一、年踰_二八十_一、適_二丁歉歲艱食之餘_一、他人支傾補壞、猶懼不_レ濟。乃於_二談笑間_一、成_二此勝事_一。外不_二以謁_二諸人_一、内不_二以費_二諸帑_一、一力為_レ之、信有_二過_レ人者_一、是役也。僧德宣、実相_二其事_一、妙有_二致思規画多出_二其手_一。又得_二信士單承亮_一、割_二膏腴_一以補_二田之廢_一。併書_レ之以告_二來者_一。

と載せられている。このように「錦鏡池記」は雪竇山における智鑑の活動を如実に伝える貴重な史料といえる。

(24) 『攻瑰集』卷八「今体詩」には「雪竇道中」「錦鏡」「妙峯亭」「隱潭」と題した雪竇山に関わる一連の詩が載せられている。

張良臣（武子、雪窗）には『雪窗集』一〇巻が伝えられているが、雪竇山の綿鏡池に関する記載は見られない。

(25) 『宏智禪師広録』巻二「泗州普照和尚頌古」の開庵嗣宗（宗白頭）が撰した「長蘆覚和尚頌古拈古集序」に、長蘆和尚、撫_レ古德機縁_二二百則_一、頌以宣_レ其義_一、拈以振_レ其綱_一。揚_レ淮壖_二兩席之光_一、繼_レ雪竇_二百年之踵_一。（大正蔵四八・一八b）

とあり、淮河流域の泗州（安徽省宿州市泗県）の大聖普照寺が存した安徽の地一帯が淮に当たり、長江下流域の真州（江蘇省南京市六合区長蘆）の長蘆崇福寺が存する江蘇の地辺りが壖に当たる。ここにいう長蘆和尚とは「泗州普照覚和尚頌古」と「真州長蘆覚和尚拈古」を著わした宏智正覚のことである。

(26) 『嘉泰普燈録』巻九「衡州華葉智朋禪師」の章に、四明人、族黃氏。（中略）紹興初、出任_レ華葉_一、次遷_レ清涼。（中略）後退_レ居四明之瑞岩。建康帥再以_レ清涼_一挽_レ之、明守亦勉_レ其行。師不_レ從、作_レ偈送_レ使者。曰、相_レ煩專使_一入_レ煙霞_一、灰冷無_レ湯不_レ点_レ茶_一、寄_レ語甬東賢太守、難_レ教_レ枯木再生_レ華。未_レ幾終_レ於端岩。（巳統蔵一三七・七九a、b）

とあり、曹洞宗の華葉智朋が偈頌で明守（明州太守・明州府主）を「甬東の賢太守」と尊称している。甬東は明州慶元府（浙江省寧波市）の中でも特に慈溪県から定海県（後世は鎮海県）の辺りを指している。

(27) 智鑑が示した「一夜落花雨、滿城流水香」の語句

足庵智鑑と『雪竇足菴禪師塔銘』（下）（佐藤）

は、すでに『建中靖国統燈録』巻二〇「鄂州黃龍延禧禪院智明禪師」の章に「問、世尊出世、魔界傾摧、和尚開堂、有二何祥瑞。師云、一夜落華雨、滿城流水香」（巳統蔵一三六・一五〇a）として黃龍派の黃龍智明が語っているのが古い用例であろう。ついでこの語句を用いた例として、楊岐派の保寧仁勇の『保寧禪院勇和尚語録』「上堂」に「上堂。時時拏_レ処_レ說、絶_レ忌諱_一無_レ間歇_一。橫按_レ杖云、會麼。一夜落華雨、滿城流水香。卓一下、下座」（巳統蔵一一〇・一八一a）とあり、楊岐派の開福道寧の『潭州開福禪寺第十九代寧和尚語録』巻下「上堂」に「当人分上在_二体前_一、不落_レ偏円_一是何境界。放行也。諸仏放_レ光明、助發_レ実相義、言_レ下合_二無_レ生_一、為_レ祥復_レ為_レ瑞、收_レ来也。初祖門庭、不_レ通_レ水泄_一、無_レ物堪_レ比倫_一、教_レ我如何說。不_レ收_レ放。随处道場、分_レ司列_レ局、豈并尋常。一夜落花雨、滿城流水香」（巳統蔵一一〇・二三七c、d）とある。曹洞宗では真歇清了の『真歇和尚信心銘拈古』の「多言多慮、転_レ不相応」の項に「要須_レ語路_レ絶_レ心行_レ処滅_一、畢竟成_レ得_レ什麼_レ辺事_一。一夜落花雨、滿城流水香」（巳統蔵一二四・三二一d）とあり、宏智正覚の『宏智禪師広録』巻四「明州天童山覚和尚上堂語録」にも「上堂。僧問、百草頭上罷_レ却_レ平生_一。時如何。師云、脱_レ体無_レ依_レ活_レ卓卓_一。僧云、恁麼_レ則_レ遍_レ界_レ不_レ曾_レ藏_レ去也。師云、識_レ取_レ俱_レ低_レ一指_レ頭_一。僧云、一夜落華雨、滿城流水香。師云、切忌_レ撞_レ頭_レ磕_レ額_一」（大正蔵四八・三五c）とある。このように清了や正覚も用いているから智鑑の独創ではないが、『嘉泰普燈録』や『五燈会元』の智鑑の章に取り上げられたこ

とで広く知られる語句となったといえよう。

(28) 加賀前田家伝来の墨蹟として大応派(大徳寺派)の一休宗純が揮毫した一行書に「一夜落花雨、滿城流水香」という紙本墨書一幅(個人蔵)が存しており、縦二三・〇センチ、横三二・五センチで、左下隅に朱方印「一休」の落款が押されている。宗純もこの智鑑の「一夜落花雨、滿城流水香」のことが知られる。東京国立博物館編『特別展 茶の湯』(平成二九年(二〇一七)四月)などに写真と解題が載せられている。現在は個人蔵となっており、掲載許可は得られなかった。

(29) 『百愚斯禪師語録』卷一五「拈古」(禪宗全書七四・四二四b~四二七a)には鹿門自覚より以降の曹洞宗禅僧のみに限った古則公案に対して拈古をなしている。真歇派では雪竇智鑒と天童如浄の二人、宏智派では雲外雲岫と無印大証の二人、それ以外は鹿門自覚の系統に連なる北地曹洞宗の人々であつて明末の湛然円澄に至るまでの主な曹洞禅者のことが取り上げられて拈提されている。

(30) 『偃溪仏智禪師語録』卷上「慶元府応夢名山雪竇資聖禪寺語録」に「御書至上堂」(出統蔵一一一・一三四b~c)が存する。また卷下の林希逸撰「塔銘」には「乙巳雪竇虚席制闡顔公以三師聞、如_レ奏勅下。此山給_レ勅、自_レ師始。上又親灑_レ応夢名山四字」以賜。戊申移_レ育王」(同・一五五c)とある。偃溪広間は淳祐五年(一二四五)に雪竇山に住持し、淳祐八年(一二四八)に明州鄞県の阿育王山弘利寺に遷住している。林希逸『竹溪虜齋十一稿統集』卷二「徑山偃

溪仏智禪師塔銘」も同文。

(31) 『景德伝燈録』卷一五「筠州洞山、良价禪師」の章に、僧問、師尋常教_レ学人行_レ鳥道、未審、如何是鳥道。師曰、不_レ逢_レ一人。曰、如何行。師曰、直須_レ足下無絲去。曰、只如_レ行_レ鳥道、莫_レ便是本来面目。否。師曰、闍梨因_レ什麼_レ顛倒。曰、什麼处是学人顛倒。師曰、若不_レ顛倒、因_レ什麼_レ認_レ奴作_レ郎。曰、如何是本来面目。師曰、不_レ行_レ鳥道。師謂_レ衆曰、知_レ有_レ仏向上人、方有_レ語話分。時有_レ僧問、如何是仏向上人。師曰、非_レ常。(大正蔵五一・三三二c)

とあり、洞山良价(悟本大師、八〇七―八六九)が門下の一僧との間で鳥道に関する問答をなしている。また『宗門聯燈会要』卷二「澧州夾山善会禪師」の章に、

師問_レ僧、甚处来。云、洞山来。師云、有_レ何言句。云、尋常許_レ人三路学、玄路・鳥道・展手。師云、实有_レ此語。那。云、然。師云、軌持_レ千里鈔、林下道人悲。(出統蔵一三六・三八七b)

とあり、ここでは青原下の夾山善会(伝明大師、八〇五―八八二)が洞山から来た一僧との間で玄路・鳥道・展手という「洞山三路」に関する問答をなしている。

(32) 南宋中期に池州(安徽省)貴池の報恩光孝寺住持であった法応(宝鑑大師)が古則公案に対する頌古を集めて『禅宗頌古聯珠集』を編纂し、淳熙六年(一一七九)に張掄が序文を撰している。さらに一世紀半を経て、越州(浙江省)紹興路山陰県の法華山天衣万寿寺の魯庵普会が増統して元代に『禅宗頌古聯珠通集』四〇巻となしたものであり、自

序および憑子振の序を得て刊行している。

(33) 『天界覚浪盛禪師語録』巻一二「附塔銘」に付録される「伝洞上正宗三十三世撰山棲霞浪大禪師塔銘并序」(禪宗全書五九・三一九a)では「三十三世」とあるが、『天界覚浪盛禪師全集』巻一七に付される「伝洞上正宗二十八世撰山棲霞浪大禪師塔銘并序」(禪宗全書五九・五四三a)では「二十八世」とあり、道盛を洞山良价の第二八世と明記している。『天界覚浪盛禪師語録』巻一一「贊」の「第十四代、襄州鹿門覚禪師」の贊(禪宗全書五九・三〇〇a)では鹿門自覚を如浄の法嗣として「初参太白老長翁」と記していたのに対し、『天界覚浪盛禪師全集』では巻一三「贊」如浄までをそのまま残しつつ、「第九代、住襄州鹿門覚禪師」の贊(禪宗全書五九・五〇一b〜五〇二a)で「初参樅老於芙蓉」に改められている。

(34) 面山瑞方が智鑑の頂相に寄せた仏祖贊を書き下すと、
雪寶の足菴智鑿禪師。

滁州の英物、族姓は是れ呉。幼くして我が手は仏手に似たりと知り、長じては俗顔の真顔に變ずるを喜ぶ。大休に太白に嗣ぐと雖も、本と寂菴を長蘆に依る。道力は金剛の如くにして、象山の百怪も嬉り動くこと能わず。智照は藻鑑に似て、雪寶の千柄、悉く皆な感孚す。世尊・

迦葉は一代の秘密、落花流水は千古の範模なり。

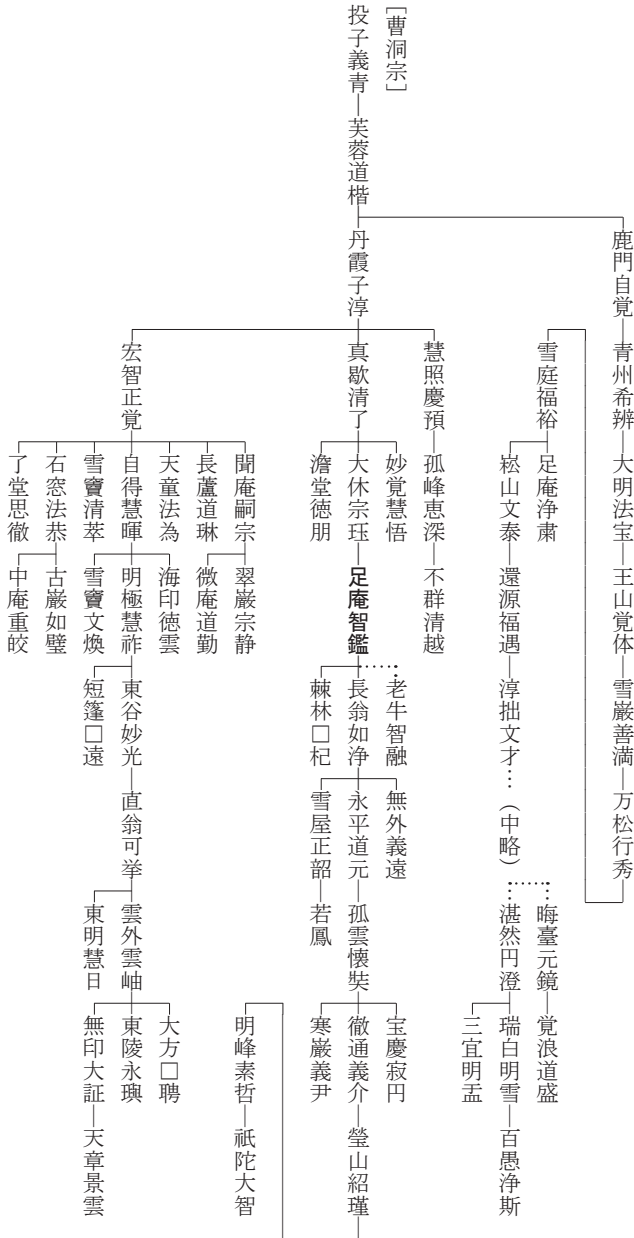
といった内容となろう。ほかに神奈川県厚木市三田の東福山清源院に操肥画・覚巖実明贊「足庵像」一幅が所蔵されている。紙本彩色で画は操肥の筆であり、実明の贊には「嘉永甲寅晚秋、信之長国不二巖」とある。嘉永七年(一八五四)晚秋に覚巖実明(別号は不二、一七九三—一八五七)が信濃松代(長野市松代町)の真田山長国寺の住持として祖贊を記している。同じく清源院には明治三五年(一九〇二)に印刷された「曹洞宗祖三国伝来歴代御祖真影」一幅も所蔵されている。曹洞宗文化財調査委員会編『曹洞宗文化財調査目録解題集6(関東管区編)』の「神奈川177清源院」の項に両資料の簡略な解題(七一頁下段)が存し、「足庵像」の白黒写真(七二頁)も載せられている。

(35) 大智は帰国に際して朝鮮半島沖で船が座礁し、しばらく高麗国に滞在している。あるいは大智が智鑑や如浄ゆかりの品々を日本に持ち帰ろうとしていたのかも知れないが、それも果たせぬ夢となったとも解される。大智が高麗国に漂着したことに關しては、佐藤秀孝「大智禪師の在元中の動静について」(駒沢大学中国仏教史蹟參觀團編『中国仏蹟見聞記』第七集、昭和六一年(一九八六)八月)の「高麗国への漂泊と帰国年時」の項に詳しい。

(キーワード)

老牛智融 水墨画 開庵嗣宗 宏智正覚 大休宗珙 自得慧暉 石窓法恭 雪寶山資聖寺 長翁如浄
『雪寶寺誌』 『四明山志』 永平道元 一休宗純 一夜落花雨 滿城流水香 祇陀大智 足庵和尚塔
『雪寶雜詠三十首』 「錦鏡記」 覚浪道盛 面山瑞方

【足庵智鑑関連系譜】



〔雲門宗〕

雪竇重顯

天衣義懷

円照宗本

大通善本

祖照道和

一定水□然

妙湛思慧

月堂道昌

雷庵正受

〔嘉泰普燈錄編者〕

淨照崇信

慈受懷深

寂室慧光

癡禪元妙

己庵□深

広照心夫

慈覚宗蹟

妙空智訥

〔臨濟宗黃龍派〕

黃龍慧南

晦堂祖心

靈源惟清

長靈守卓

無示介謙

心聞曇貴

雪庵從瑾

虚庵懷敏

明庵采西

仏樹房明全

草堂善清

野堂普崇

普明慧琳

足庵普吉

無伝居慧

懶庵道枢

高麗坦然

〔谷庵景蒙〕

照覚常総

象田梵卿

牧庵行持

法揚用璋

慈航了朴

雪林僧彦

真浄克文

湛堂文準

典牛天游

塗毒智策

古月道融

〔臨濟宗楊岐派〕

楊岐方会

白雲守端

五祖法演

開福道寧

月庵善果

老衲祖証

月林師觀

無門慧開

無本覚心

圜悟克勤

虎丘紹隆

応庵曇華

密庵咸傑

〔虎丘派〕

大慧宗杲

〔大慧派〕

密印安民

別峰宝印

石橋可宣

此山師寿

仏鑑慧勲

瞎堂慧遠

叡山覚阿

仏眼清遠

雪堂道行

晦庵慧光

蒙庵元聡

我禪房俊苻

濟顛道濟

〔大慧派〕

大慧宗杲 大円遵璞 普門從廓

蒙庵思嶽 大日房能忍（日本達磨宗）

拙庵德光 無際了派 足翁德麟

元衡法平 秀巖師瑞 大川普濟 石門善來 古帆口遠

少雲宝曇 浙翁如琰 偃溪広聞 一峰妙齊 方山海印

北磻居簡 物初大觀

無用淨全 笑翁妙堪 無文道璨

〔虎丘派〕

密庵咸傑

松源崇嶽 運庵普巖 虚堂智愚 南浦紹明 宗峰妙超 徹翁義亨 言外宗忠 華叟宗曇 一休宗純

曹源道生 滅翁文礼 雪蓬慧明（五燈会元編者） 德翁宗碩 乾用宗梵 足庵宗鑑

破庵祖先 無準師範 東福円爾 希叟紹曇（五家正宗贊編者）

〔天台宗（趙宋天台）〕

四明知礼 広智尚賢 扶宗繼忠 草堂処元 息庵道淵 円辯道琛 月堂恵詢

神照本如 法真処咸 安国元恵 智涌了然 覚雲智連

南屏梵臻 慈辯從諫 車溪扨卿 竹庵可観 北峰宗印 我禪房俊苾